

25
965

南極探檢

25-965



栗原敏次郎譯補

南極探檢

東京内外出版協會



目次

第一章 極地へ！……………一頁

第二章 何の目的……………三

第三章 往昔一瞥 其の一……………一七

第四章 往昔一瞥 其の二……………二六

第五章 南極の陸……………三六

第六章 探検初期……………四三

第七章 二大探検 其の一……………七四

第八章 二大探検 其の二……………八二

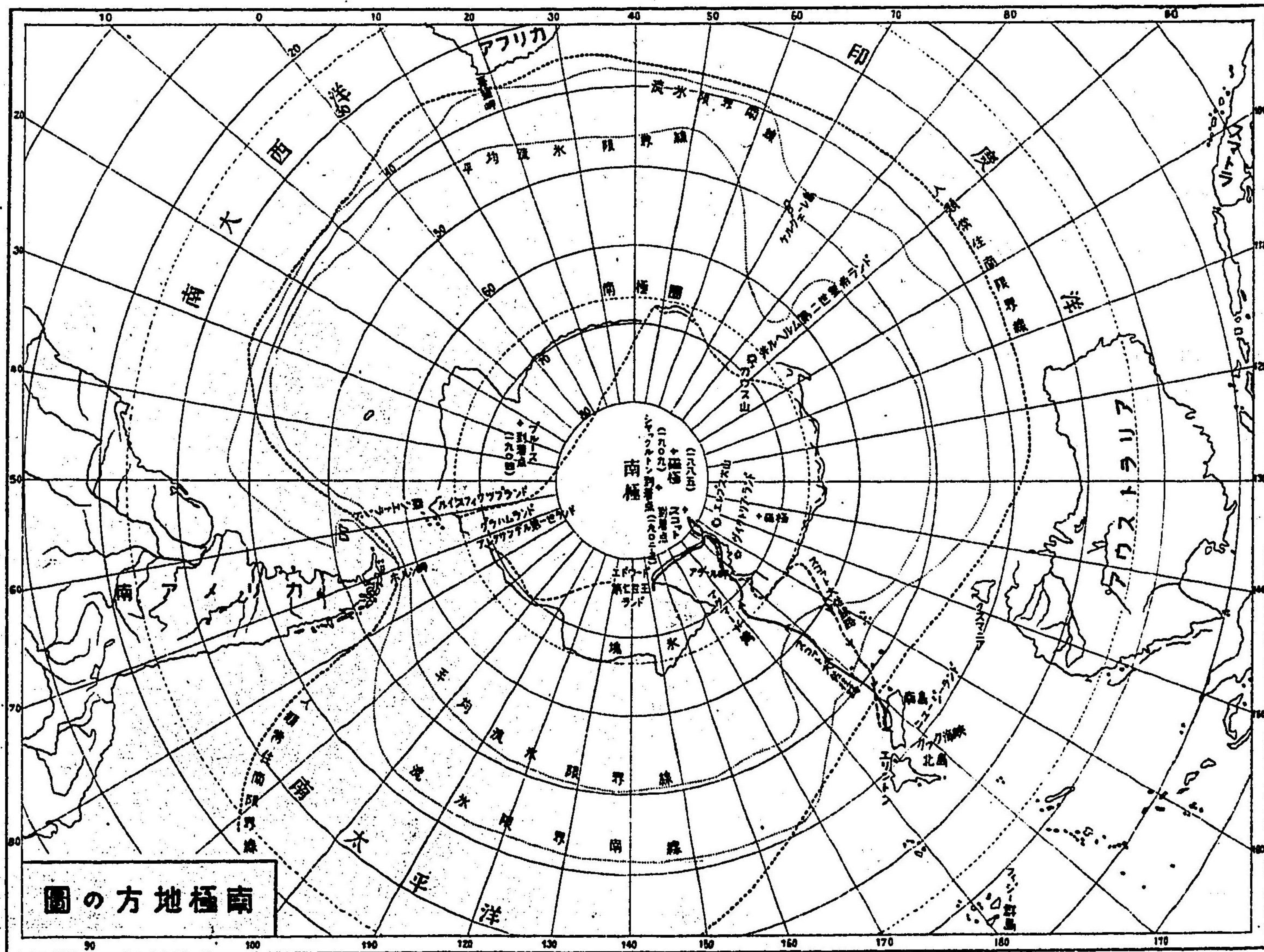
目次

目次

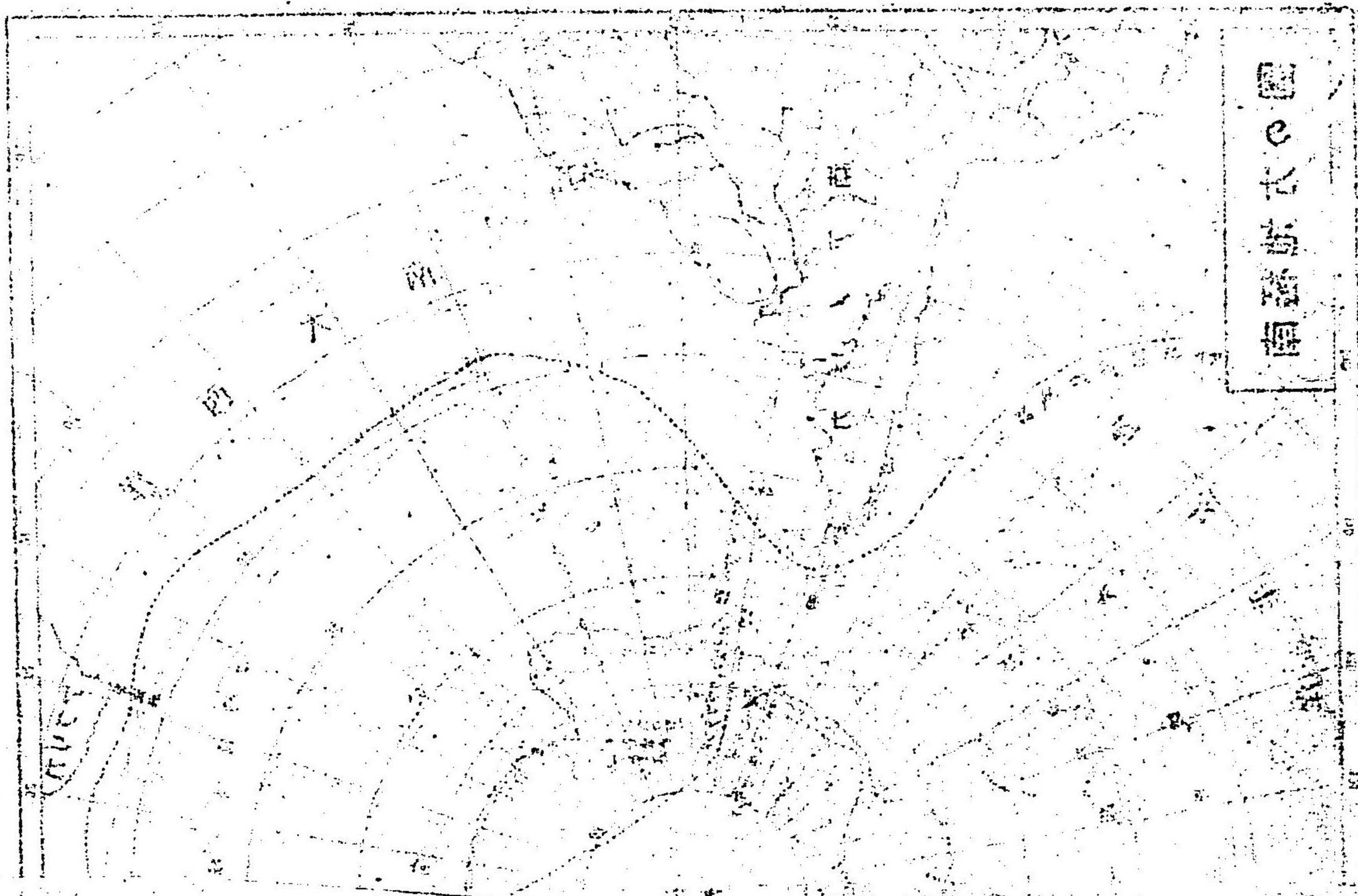
2

第九章	三國競争 其の一	九四
第十章	三國競争 其の二	一〇二
第十一章	三國競争 其の三	一一二
第十二章	蘇佛兩隊	一二〇
第十三章	現勢一斑	一二八
第十四章	將來	一三四
第十五章	希望	一三六

目次終



南極地方の圖



谷深大るたげ妨を進前の行一トッコス



處棲のンギンペるあに下崖斷の氷碎頭岬エヂロク
(りあドンホ十八七重體く近に尺四さ高てしに鳥るす産に方地極南はンギンペ)

南極探検

第一章 『極地へ！』

黄金花咲く國を求めんとしたゼノアの一水夫は、碧眼銅膚の蠻人住む椰子繁る島に届いた迄であつたが、其の前後に勃興した發見的精神は、何時の世までも其の跡を絶たず。地上一平方吋の地たりとも、人未だ到らぬ隈なきまでになさんと、悶躁さに悶躁いた。言ふまでも無く幾多の犠牲は山神水靈に捧げられた。然れど、世界の地圖にあつた幾多の白い部分は、之が爲めに縦横に線を引かれて、山の脈、水の路、明かになつたのも尠く無い。唯嚴肅なる沈黙の姿を宿す兩極の氷門、堅く鎖す『永遠』の扉開かん

2
に由無く、幾世紀は過ぎた。

科學の進歩、航海術の發達、凡ての物質的文明の隆盛と共に、何時かは此の扉を開かんものとの苦心焦慮、固より人命の失はれたのも稀では無い。實にも『極地へ！』の聲は幾多探検家の夢寐にも忘れ得ぬ所、其處へピーリーの北極發見と云ふ事實が現はれた。競争者クックは、一大詐欺漢として社會の外に放逐さるゝの已む無きに至つたが、ピーリーが北極に届いたと云ふことは確實だと承認された。然れば更に『南極へ！』の聲が、高まつて來たのに疑ひは無い。況してシャックルトン中尉は、既に南緯八十八度の所まで行つたのでは無いか。其處に樹てられた『ユニオン・ジャック』の光榮は、未だ人の記憶に新らしい。之を聞いて男らしき男の血潮が湧き起つたのは當然だ。然れど、何故に人々は『極地へ！』と叫んだか、叫びつゝあるのか。

第二章 何の目的

南極探検家の一人ボルヒグレヰンクは言つた、兩極探検隊は幾度か組織せられた。其の或る者は、中道にして歸り來るの已む無きに至り、其の或る者は、去つて再び還らなかつた。然し、此等の探検隊が、人類の知識に増す所があつたことは確實だ。

實に『永遠』の領する『極』の門、よしや幾多の犠牲を求むるとも、潜つて光輝燦然たる結晶宮裏に入らねば已まぬ、と云ふ人間の望み、然れば如何なる目的かある。

3
極地探検といふことが、單に『極』の發見ばかりを目的とするもので無いことは無論だ。唯此の目的のみで動いたとしても、堪へ難き困難、冒し難き危険に打勝つと云ふ意志に於て誇る可きには相違無いので、加ふるに、

我等が住める地の上から、少したりとも未知の境を除かうと云ふのは、人間の天性、單に『極』の発見ばかりを志したからとて、決して咎むべきでは無いが、未だ〜他に重要な目的があることを忘れてはならぬ。

第一は、地理學上の目的だ。

極圏内にある水や陸の分布の様子、陸地の高さ、大さ、性状を調べる事である。斯くて始めて地圖の上の白い部分に、確實なる縦横の線を施して、我等の知識を増すことが出来る。

時の經つと共に、北極圏内の未知境が減じたのは事實である。今日では、スピッツベルゲンの邊から、未だもつと遠くまでも、氣樂に旅行することが出来る。既に第九世紀の頃『ノルマン』人に発見せられたグリーンランドにした所が、十分精密な調査が行届いて居る。これは第十九世紀末に於けるピエリーの探検の結果だ。又彼のナンセンの冒險以來、未だ調査の出來

ぬ極圏内には、群島や離れ島があるだけの事だと云ふことが確實になつた。だから是れまで発見せられた種々なる島は、これに近い大陸の一部分だと云ふことも明かになつた。ベーレン島やスピッツベルゲン島、偕はフランツ・ヨゼフ・ランドなど、其の地質の構造から言つても、動植物の關係から視ても、スカンデナヴィアに續いたものだと言ふ事になつた。斯様にして、北極圏の方は兎も角地圖にでも描けさうになつたのであるが、南極は如何に！

數百料の間、氷の鏡に包まれた南極の大障壁の内には、何物を藏してゐるのか。廣大無邊の南極大陸か。抑も將た氷壁殿しう屹立せる群島か。唯陸に圍まれた海があると云ふことだけは、北極圏地方に反してるとは知られるが、其の他の事は一切暗々黒々、南極探検の一つは、確かに此等の事を明かにすると云ふ點にある。

第二は、地質學上の目的だ。

南極の地質學研究は、特に注目すべきものである。と云ふのは他でも無い、南極圏で今までに発見せられた活火山や火山群は、北方の火山群たるアイスランドやジャン・マイエンに相當すると云ふ事。又、花崗岩や結晶板岩と結び付いた有紋砂岩のあると云ふ事なのである。若し今此の第二の問題を事實だとすれば、地質學上の第三紀に現はれた動物の中に、南アメリカとアウストラリアの兩方に棲んで居たものがあると云ふ事を説明するに足るので。即ち其の時代、此の二大陸が繋がって居たに相違無い。而して其の繋がった所は、今失くなつたが、其の残りが南極圏内にあるのならうと云ふことになる。

第三は、植物學上の問題だ。

グリーンランドやスピッツベルゲンのやうに其の大部分が雪と氷に埋つ

てる所でも、櫻櫛のやうな植物の化石が発見せられたと云ふ。これは、低緯度の所から高緯度の所へ移つたのだとしても、其の當時極圏内の地方は、櫻櫛が育つと云ふ程、氣候が暖かかつたのだらうか。此の地球上の温度は、今よりかもっと平均して居たのだらうかと疑はれる。極北の地方で集めた植物の中には、北アメリカやスキヤインドにあるものがあると云ふては無い。最近の発見に據ると、地質學上の第三紀には、南極の氣候も暖かであつたらしい。是れ迄の事實を集めて見れば、南極圏内にも屹度植物の化石があるに相違無い。これがあれば生物の進化と云ふことには大變有益な材料になる。

元來南極圏地方では、南緯六十四度を越すと植物が無いと思はれて居た。所が一千八百九十五年(明治二十八年)、ホルヒグレヴィンクは、ヴィクトリア・ランドの南緯七十一度の所て植物を採集した。兎も角南方高緯度の

地方にある群島は、能く似寄った植物を生ずると云ふのだから、これには大に研究を要する事である。

第四は、動物學上の問題だ。

ナンセンは、フランツ・ヨセフ・ランドの北東にある小さい岩島で、楔形の尾をしたり又は薔薇色をしてる海鷗の卵を孵す場所があると云ふことを發見した。元來此の北極特有の鳥が、秋毎にアラスカの北岸バロー岬を北東の方に飛び行くと云ふことが疑問であつたのだが、ナンセンの發見で其の理由が解つた。又ナトルストの研究に據ると、北極狼は、一千八百九十二年以來、グリーンネル・ランドからグリンランドの北端を廻つて、其の東岸に出たと云ふ。ホルヒグレヴィンクは、南極に棲む海犬にある痕痕からして、恐らく北極熊のやうな猛獸が南極圏内にも居るのだらうと推定して居る。

抑も南極と北極とは、^{まる}全て正反對の方向に雲山萬里相隔て、居るにも拘はず、其の動物——海中の動物には似たものがある。此の種類の動物は、兩極圏の間にある大洋の中には居ないのである。此の問題を猶ほ委しく研究すれば、地球の溫度が漸々冷却する際に、兩極圏の内には或る一定の動物が出來て、其の動物は今日でも深い所にある寒流の御蔭で、互に往來してゐるのではないかとも思はれる。

第五は、氣象に關する問題だ。

北極圏地方の氣象は、比較的に能く知られて居るが、未だく興味のある問題が残つて居る。是れまで北半球には、冬季に一番寒い所が二箇所あると思はれて居た。其の一つはグリーンチル・ランドで、猶ほ一つは東シベリアの小都會エルホヤンスクである。ところがナンセンは、此の上に未だ一つあると云ふことを發見した。其はグリーンランドの内部氷野にある

のだ。

南極の氣象に就いては、其の材料が大變に尠いので、唯一般に斯うだと思はれるだけなのだ。元來南極地方は海が主なのだから、氣候が平均してゐる。其が爲め南方高緯度の地方では、厚圍氣の法則を研究するのに、水陸犬牙交錯の北半球よりか都合が好い。

第六は、海洋に關する問題だ。

極海や其の潮流の研究と云ふ事は大切だ。『ジュアネット』探検隊が滅落し、『フラーム』號が壊された氷山の源は、ベーリング海峡の地方にあると云ふことなどもこれで解る。又赤道地方では熱い空氣が上層に昇つて兩極に流れ、其處から地上を赤道の方に向いて歸つて來ると云ふ空氣流動の原則と同じやうに、極地に向ふ暖潮の源は赤道地方で、寒潮は極圈の地帯に始まる。寒潮は、所謂調節潮流であつて、是に依つて水の分布状態を平均

せしめる。此の潮流は、大洋の底の方を赤道に向いて流れるので、これが世界の海の深い所の低温度の原因となる。ところが北極の海は、陸地や又は海底の突起で、殆ど閉鎖されたやうな工合になつてゐる上に、ナンセンの温度測定に據ると、底の方には比較的暖かい水があると云ふのだから、大洋の底に流れる冷たい潮流は、主に、凡ての方面に開放せられて居る南極の海から來るに相違無い。

第七は、氷河の問題だ。

極圈地方は、現時の氷河並に氷河時代に威力を逞しくした自然現象の研究には非常に價値がある。氷塊が、以前に存在して居た地方から全て消え失せたにも係はらず、極圈地方の内部には現在に至るまで存在して居る。然れば、極地は未だ氷河時代なのだ。これはグリーンランドの内地や南極では、十分に觀察することの出来る事なのである。南極地方には、地上に

於ける氷雪の作用で出来た廣大な地域がある。それに南極地方では、氷河生成の状態が能く現はされて居るので、此の事は、北極地方やアルプ山系に於ける経験では十分に了解が出来ぬ。又、北極地方は、乾燥した大陸的氣候の影響を受けた氷河時代の標本で、南極地方は、濕った大洋的氣候の影響を受けたもの、標本である。だから、南極の氷塊は、北極のものとは全て其の性質が違ふ。但此等の事に就いては、氷山、浮氷、流水、乃至、鹹水氷、淡水氷、氷河等の氷の起原、組織、分布、大さ、形状及び運動を精査する必要がある。

第八は、地磁力の問題だ。

航海上重要な地磁力、其の地磁力の不均な分布や變遷、又地磁力とは密接な關係が有つて、暴風雨に影響があると云はれる極光の現象等は、其の原因や其の條件に就いて、未だく精細な研究を要するのだ。此に就い

ては、地球上に於ける陸地の分布と云ふことも無關係とは謂はれぬ。乃ち陸地の澤山ある北半球では、磁力の中心が、遠く離れた二つの場所にある。一つは、ポルティア・フェリックスにあり。一つは、シベリヤにある。之に反して、陸地の少ない南半球では、アウストラリアと南極の陸地との間に殆ど相接した所にある。又、南極地方に於ける地磁力の觀察は、從來殆ど無かつたと言つても可い位なのだから、學術の上から言つても、實用の上から言つても、必要なことである。然し、最近のシャックルトン中尉の探検は、餘程此等の點に益する所があつたらしい。

第九は、人類分布に關する問題だ。

南極地方には、何れの時代にも人類の住んだと云ふ事は無いと云ふのが確實らしいが、北極地方では、『エスキモー』と云ふ興味深き種族が、其の沿海地方に住む。此の種族が、自然の敵たる極地のあらゆる境遇に適應し

て居ることは、驚くべき程である。此の種族が、過去から現在に至るまでの播布區域は確定して居ないし、其の系統に就いても、單に種々なる推定をするに止まるだけである。

第十は、産業上の問題だ。

磁針は、其の北を指す力を失ひ、凡ての星は、地球の自轉に伴れて出沒すると云ふこと無く、地球回轉の遠心力は無くなつてしまひ、半歳の晝と半歳の夜と互に交替すると云ふ極圏内の地方でも、學術の爲めには非常に研究すべき餘地のあることは、前に述べた通りだが、産業上から言つても、見捨てたものではない。極地に生物の少ないのは勿論の事であるが、極海には、種々な有用動物が居る。されば、數百年來常に漁獵區域として、人影を見ぬことは無かつた。唯無暗矢鱈に獵つたので、重要な動物は、絶滅してしまつたり、又は遠く北の方へと引つ込んだのであるから、更に未だ

知られぬ獵場を發見するか、又は南極の方に新らしい獵場を見つける必要がある。但、鯨は、南方高緯度の地に入り込むと云ふことが稀なのであるが、海犬の大きなものと、無數の群を成して居る『ペンギン』鳥だけは、南極地方の動物界に特有のものである。

極地探検といふことが何の目的を有つて居るのであるかと云ふことは、さつと右の十箇條で明かである。人類が、幾多の犠牲を辭せずして、極地探検に従ふと云ふのも、決して一時の虚榮心からでは無い。其が人類の進歩に貢献すること斯の如く大なるものがある爲めである。武力の戦に勝つと云ふばかりが人類の總てでは無いだらう。世界の文化を一寸でも五分でも進めると云ふことに就いても、十二分の努力をせねばならぬのが、人間の天職である。然れば、一面極めて好奇と見られるやうな極地探検事業に對しても、十二分の敬意を表し、十二分の後援を與へると云ふことは、文

明國民としての義務である。

第三章 往昔一瞥 其の一

南極探検を説くに先ちて、往昔北方に於ける人類の活動に就いて一瞥して置くのも興味が無いでは無からう。爰にざつと其の一斑を記して見ようと思ふ。

アレクサンデル大王が、其の光榮ある戦勝の結果として、當時の時勢から言へば、殆ど豫想外の所まで、東方に領土を擴げた其の頃であつた、一人の謀計に富んだ人が出て来て、未だ訪ねられたことの無い北方の地に就いて世に貢獻する所があつた。此の人は、卓越した天文學者である。北地の産する錫や琥珀の取引地として繁昌した所の市民である。然れば、北地の研究には極めて好都合の資格を有つて居る。誰ぞ、此人は！

アッシリア生れのギリシア人ピテアスが即ち其れである。アッシリアと

は、今日のマルセイユである。ピテアスは、大變敵のある人ではあつたが、非常な學者であり非常な旅行家であつた。北部エウロッパや北部大西洋に關する最始の報告は、彼の功績に歸せねばならぬ。彼は、紀元前三百二十年の頃、學術上並に商業政策上の目的で旅行をして、錫や琥珀の主な産地を探し出したのだ。

歴史に見えた一番初めの極地航行船は、イスパニアとフランスの岸を廻り、ブリタニアの島に沿うて北方に馳せ、遂に一つの島に達した。此の島はブリタニアの島を距ること六日程、凍れる海に隣して居た。此の島の附近は濃霧甚しく、氷塊が多いので、其の前に進むことは出来なかつたのである。但此の島の位置は精密に知られては居らぬ。多分シエトランド群島中の主な島であるマイランドかウinstかであつたのだらう。これはタキッスに據ると、ローマの艦隊がスコットランドを周航した時、オークネー

ズから遙かの遠方に當りて、ピテアスの發見した島テューレを觀たとある。其の島は、マイランドかウinstであると云ふに基くのだ。又一方では、スカンデナヴィアであつたとも思はれる。元來スカンデナヴィアは、近時に至るまで島だと思はれて居た所なのであるし、其の上ヘルグトの研究に據ると、ピテアスの報告してゐる時間は、ノルエーに行く最短時日だから、斯様に想像することも出来る。ピテアス自身は、其の發見した島に名稱などを附けなかつた。唯ブリタニア諸島の中、最北のもので、として居るだけだ。後になつて、之にテューレと云ふ名が附けられた。

ピテアスの報告は、實際信すべきものであつたのだが、當代の人には、何の事か薩張り解らぬので、信ずるに足らぬとせられた結果、世に忘れられてしまひ、テューレの島も何の島なのやら判然せず、多分イスランドだらう位の事になつた。

古代に於て極地の方へ進んだのは、件のピテアス一人である。それから一千百年も過ぎて、紀元後第八世紀の頃、アイルランドの僧侶が、始めてイスランドの地を踏んだ。此の僧侶は、異教者に福音を傳へんが爲め、又非常に漂浪を好む性質があつた爲め、其れまでにオークネー諸島や、シエトランド諸島、又はフェールオエールなどへ行つたことのある人だ。

北極地方の探検に取つて一層有力なのは、『ノルマン』種族のやつて來た事だ。これには種々な原因もあるが、兎も角紀元第九世紀の半頃からして、其の故郷たる北エウロッパの地を去つて、殆ど人の知らぬ北方の諸島へと移つて來た。『ノルマン』族の漁夫が、スカンデナヴィアの沿岸を知つて居つたのは、ノルエーの貴族オテーレ即ちオッテルが、スカンデナヴィアを廻つて發見の旅をしたよりも以前の事だ。信すべき舊記に據ると、此のオッテルは、始めてエウロッパの北端を廻つて白海に出て、カンダラクシヤ

灣まで行つたのは確實だ。世に傳へるやうにドヴィナ河口まで行つたと云ふことは疑はしい。

オッテルと同時代の頃に、海賊のナドットは、始めての『ノルマン』族としてイスランドに上つた。然し此の地が島だか何うだかと云ふことまでは確定しなかつた。之に次いで、同種族のガルダールは、イスランドを周航して其の島だと云ふことを明かにした。八百七十四年以來、非常に澤山な『ノルマン』族が此の地に入り込んで、新首府として一小都會のライクヤヴィックを建設した。此と同時に少數のアイルランド僧は、異教者の迫害を受けて殺戮され、又はイスランド乃至其の他の北方諸島にある自分等の住家から逃げねばならなんだ。

八百七十年後になつて、海賊のグンピョルンと云ふ者、暴風に吹きつけられてグリーンランドの近所まで行つた。エウロッパ人で此の地を見た

のは、此の海賊グンビョルンを嚆矢とする。但、此の地に上ったのは、これから百年も後の事、彼のエリック・ラウダを初めとする。彼は九百八十二年其の國から放逐せられ、當時の習慣に従うて涯かきも無い未知の海に向って航行し、グリーンランドに到着した。彼は其の西岸を縦横あはに歩行あいて、到頭住むべき場所を見つけた。其處で、何か優やさしい名を附けて移民を引き着けようと思ひ、新らしく發見した此の海岸をグリーンランド、即ち『緑の陸』と命名した。此の名が其の土地の状況に相應せぬのは勿論の事だが、西海岸の氷雪無き場所や、東海岸北部の地方は、漸々に相當の住民が出来た。斯くて此の新らしい殖民地からは、更に奥深く探検して、何等かの發見をしようと思ふ計畫が屢々實行せられた。此は一つには單に好奇心からでもあるし、一つには『エスキモー』の播布區域を調べてみようとの爲めであつた。此の旅行で、『ノルマン』族は、北緯七十三度、即ち今日のウー

ペルニヴィックまで行つた。又西はランカスター・ズントからバッフィン・ランドの方、南はアメリカ大陸の沿岸を進んだのだ。又、トールギルは、困難な旅行をした結果、グリーンランド東岸の北部を調べて居た。彼は此の旅行で其の船を失くし、其の部下の大部分を失つた。

斯んな風で、グリーンランドには、基督教徒の殖民地が出来て、數百年も續いて行き、約一萬人の移住者は、平穩無事の生活をして居た。此の地の住民は、イスランドやノルエーと頻繁な往復をして居た上に、其の精神的文明の發達から言つても、彼等の故土に劣らなかつた。ところが一千二百六十年、此の地方がノルエー王の配下に屬してから、グリーンランドの産業は非常の壓迫を受け、其の繁榮の源は涸らされて、漸次衰運に向ふてとになつた。そこへもつて來て、紀元第十世紀に當り、黒死病と云はれてエウロッパ全體を荒した『ペスト』は、此のグリーンランドの殖民地まで

も襲うて来た。其の上に、エウロッパ人の渡來の爲め、離れ／＼になつて居た『エスキモー』人が、其の勢力を回復して、西海岸の地に急劇に増殖し、到頭逆襲を試みて来るようになった事や、又エウロッパから移住者が其の跡を絶つた爲め、『エスキモー』人との雜婚が始まつたりしたので、グリーンランドの殖民地は廢滅に歸した。

遂にはエウロッパとの交通も無くなり、最北に於けるエウロッパ人の立脚地は、文化の世界から離れてしまひ、紀元第十五世紀の頃になつては、『ノルマン』族が、グリーンランドやアメリカを發見したと云ふことは、當時の人々から忘られてしまつた。唯グリーンランドに関する文書は、ローマの寺院文書の中に遺^{のこ}つては居たが、少しも顧みられず、イスランド通——これもローマ以外には皆無と謂^いつて可い位少數のイスランド通を除いては、紀元第十一世紀に現存して居たカノニクス・アダム(ブレイメン生

れ)が、最北方のことに一番密接の關係がある。紀元第十三世紀のオアルベルトウス・マゲヌスも、時々北方にある諸島で、其の前後に移住せられた島のことを書いて居る。

第四章 往昔一瞥 其の二

アダムの言ふ所に據ると、其の當時北洋には、イスランドの他、まだ二三の島があつて、グリーンランドは、大きい方のものであつた。此の地に住む人は綠色だから『緑の陸』と云つたのださうな。其の海岸は海賊の住家で、基督教が入つたのは、極近頃だと云ふ。此處からずつと北の方は、唯氷と暗黒とばかり、海に棲む怪物に満ちた穩な海がある。これは、ピテアスの名けた『海の肺臓』で、其の爲めに航海は妨げられて居る。此のどろ／＼したやうな海や、北方の怪は、ラルフラム・フォン・エッシェンバッハ乃至多數の戀愛詩人の題材となつたものだ。

又イスランドの海岸に積み累つて居る太古の氷塊は、全て黒くなつて乾き、そして燃えるのだ。グリーンランドの近所には、大きな口を開いた

洞穴があつて、其の中に水が落ち込む。世界の端が此處に在るのだとも謂はれて居た。其の黒く乾いた燃える氷と云ふのは、イスランドの噴火山から噴き出した灰の事である。又彼のどろ／＼したやうな海と云ふのは、凍つた極海なので、其の當時は殊に航海が六ヶしかつた。其の海が、軟かいやうな粥のやうな新らしい氷で被はれて居て、どろ／＼のやうになつて居たのだらう。又氷山で一杯になつて居る東グリーンランド附近の海流では、其の中に危険な渦巻も出来て居たらう。要するに、アダムは、眞偽を混淆して居る。是れは、彼のやうな學者でも、當時の迷信的の考から脱することが出来無かつた爲めである。

アダムが簡單に書き遺して置いた北航の記録がある。これはフリース・ランドの貴族が行つたので、二三の理由の下に、一番最初のドイツ人の北極探検だと云ふことが出来る。其の記録には、架空の話が混つて居るのは

言ふまでも無いが、又事實だと信じて可い事もある。紀元一千四十年頃、ブレイメンを出た探検隊なのだ。其の主な目的は、極地の状勢を確實にすること、並にエーゼル河から正北に航走すると、少しの陸も無くして涯無き大洋が眼前に展開するばかりだと云ふ風説を確かめることとの二點であつた。然しフリース・ランド人は、恐らくドイツの海岸を荒した『ノルマン』族に對する報復の爲め、海賊をやり、彼等の冒險的突進は、『ノルマン』族の諸島を掠奪するに止まつた。

アダムは、此の遠征隊に就いて、次のやうに記して居る。

大僧正アダルベルトは、謹んで余に物語つた。彼が主僧で居た頃、フリース・ランドの最高貴族共は北方に航行した。これは、當時道路の説に、エーゼル河口を出て、北方に向へば、陸地は無く、海——凝固した海があるばかりだとのことを調べる爲めであつた。此の好奇心を満たさんが

爲め、彼等の一隊は喜び勇んでフリース・ランドの岸を離れた。斯くて、一方にはデンマーク、一方にはブリタニアを見てオルカディア諸島に着いた。此の地を去つて後、右手にノルマニアの地を望んで、長い——航海をなし、氷雪堆きイスランドに達した。彼等が此のイスランドの地を出て、最北極指して廣い——海を通航した時には、唯運命を神に任せただが、突然、彼の凝固した大洋に出て、眼も通らぬ闇い——霧の裡に這入り込んだ。見よ、其處には、差す潮引く潮の爲めに絶ゆること無き海の波が、何處とも知れぬ源に引き返すばかり、救ひの望みなき不幸の船員は、此の渾沌の境に引き込まれてしまつた。人の言ふ所に據れば、これが底知れぬ洞穴の口である。傳説に云ふ、凡ての海は此處に流れ込み、潮の満干は此處から起るのだ。斯くて彼等が神に祈りを捧げて唯死期の來るのを待つて居た時、思はずも激しき逆潮の爲めに、船は流され、好時

機に危険の地から救はれ、一生懸命に漕いで波から免れることが出来た。斯かる極めて危険の境を脱して、彼等は思ひ懸け無くも或る島にと漂着した。此の島は、大變に高い絶壁で固く取り巻かれ、恰度城壁に固まれた都市のやうであつた。此の島の内部を精査せんとて上陸したところが、地中に穴居して居る人類を發見した。其の穴居の戸口に、黄金や又これに似た金屬で出来た桶が澤山ある。世の中に稀なものだから高價なものに相違無い。彼等は、自分に運べるだけ此の寶物を持って、凍えてる漕手を本船へと急がした。ところが、突如、吾曹が『チクローペ』と呼んで居る大きな人間に追かけられ、其の前には、並ならず大きい犬が馳せて居る。此の大男共は、仲間の中の一人を捉へて裂いてしまつた。残りの者は、幸にも船に届いて、唯大男の呼び聲を聞くばかりであつた。フリークス・ランドの旅行隊は、斯んな危険に遭つて、ブレーメンに歸つ

て来て、アレブラント大僧正に、秩序正しく物語をした。云々。

却々荒唐無稽の事もあるが、此の中から信ずるに足るべき部分を摘み出すと、フリークス・ランド人は、長い航海をして、先づイスランドに着き、其處から極地に進まうとしたのだ。ところが、彼等はだんぐりに凍つて行く海の中に閉ぢ込められてしまひ、激しい潮流に倅り、二三隻の船を失うて、漸々此の潮流から逃れ出た。それから、南に歸つて新らしい陸地に達した。其處には人間が穴居して居り、澤山な寶物を蓄へて居たのだ。これは多分フェレーエルカシエトランドであつたので、此處に居た『ノルマン』族は、未だ海賊を營んで居り、彼等の地下の住家には種々な寶物を集めて居たのだ。フリークス・ランド人共は、其の幾分を掠奪し、幸にも『ノルマン』族の追撃を免れて其の船に着き、急いでブレーメンの方に歸つて來た。フリークス・ランド人が、其の冒險的計畫を何の位まで仕遂げたか、又彼等

は何の位まで極地に近づいたかと云ふことは、能く解らぬ。

アダムの書いた所に據ると、紀元第十一世紀に當りて、『ノルマン』の王ハラルドは、フリードランド探検隊に似た新しい極地探検隊を企てたと云ふことだ。これは、テューレ島から先への海の工合や廣さを調べ、爲めてあつたのだが、これも世界の端と思はれた濃霧に蔽はれた所まで行つて、急いで歸り、潮流や渦巻や、迫る危険を免れたのだ。

其の後暫く極地探検と云ふことは止んで居たが、一千三百八十年の頃、新しい極地探検隊が組織せられたとの説がある。これはヴェネチアの航海者ニコロ・ツェノーとアントニオ・ツェノーとに關するものなので、其の記録と云ふのも、極めて断片的ながら遺つて居る。然し、これは其の後の研究に據ると、全然虚構の事らしいと云ふことが明白になつた。其の記録と云ふのも、大部分後人の手に成つたものだとの説が確實だとせられて居

る。唯此の記録が、後來西北方の通航路を求めると云ふ動機を興へるに至つたことは忘れてはならぬ事である。

アメリカの発見、インドに至る海路の発見と同時に、棄て、顧みられなかつた極地探検も、亦再び芽を吹き出した。大西洋、インド洋、太平洋などの海路は、其の発見者たるイスパニア人やポルトガル人の手に横領せられた。これは一つには商業政策上の考に基き、又一つには當時行はれた獨占的思想の結果である。ところが、エウロッパに於ける其の他の海國——殊にイギリスやオランダなどは、同じくインドの珍寶を得たいと苦心した。そこで到頭北方アジア、又は北方アメリカを迂回するか、さ無くば、北極を横ぎつてもインドに到る航路を求めようと悶躁いたのだ。若し此の新航路が発見せられたとすれば、大陸の南端を迂回するよりも餘程近いに相違無い。だから、紀元第十五世紀の末以來、北西又は北東の航路を開かん

が爲め、引き續き探検遠征が行はれた。然し、此の路からインドに達したものは一人も無い。そこへもつて来て、北方高緯度の地方には、魚群や毛皮を獲る動物が豊饒だと云ふことが知れ渡つたので、北方の航路を發見しようとする考は、聊か勢が衰へた。其の上、氷塊の状態が極めて都合好くないので、北西又は北東の通路と云ふことに關する考は、紀元第十七世紀以來全く無くなつてしまつたのである。

紀元第十九世紀になつてから、更に新しい二つの通航路を求めたのであるが、これは、東アジア、又は南アジアに達しようとする考では無く、全く學術上の關係に基いたものだ。元來極地に關する種々な計畫は、専ら實用的の原因から來たのであつたが、今ではこれが變つてしまつたのだ。夫れから又、フランクリンの探検隊が滅落して以來、人間と云ふことの關係も加はつて來た。即ち此の探検隊を探し出す爲めに、非常な費用を懸け

て、十個以上の救援探検隊が派遣せられると云ふやうになつたのだ。此の救援隊は勞して功無してあつたが、極圈内地方に關する知識を増したことは疑ふべくも無い。

斯様にして北極に突進すると云ふことには、古來非常な奮闘努力をなして來つて居るので、猶ほ第十九世紀以後に於ける活動は目覺しいものがある。ビーリー大佐が、到頭北極を發見するやうになつたと云ふのも、決して單に一朝一夕のことと觀る譯にはゆかぬ。此等に比較すれば、南極の方面は幾何か繼兒扱ひにせられて居たと云ふ風が無いでは無かつたが、然し北極探検の進むに伴れ、此の方面にも、却々花々しい活動が演じられることになつた。人々の心は殆ど一種の國際的競争を惹き起すまでに熱せられて居るのだ。

第五章 南極の陸

南極大陸が存在していると云ふことは、餘程古くから言はれて居ることなのである。これは北極地方にある陸地に對して平均を保つ爲め、是非無くてはならぬと云ふ考から來たもので、プトレマイオスなども此の説を唱へ、インド洋の南端を限る大きな未知の陸があるものだと言明して居る。此の考は、中世に於けるプトレマイオスの復活及び大発見時代以來、有名な地圖學者のメルカートルやシェーネルや、オルテリウス、之を傳播し、紀元第十八世紀の後半に至るまで勢力を有つて居た。此の考に據ると、アメリカ、アフリカ、アジアの南にある廣大無邊の場所が、悉く海であつたとすれば、地球は北の方が重過ぎるやうになつて、覆るに違ひ無いと云ふのだ。斯んな科學的空想は、其の所謂南方不明の土地を發見せんが爲め、幾多の發見

隊を出さしむるやうになつた。而して其の陸地と云ふのは、地球の南方を取り巻いて居り、他の大陸の南端と接して居ると云ふので、地圖の上には、此の無邊の廣袤あるものとして記入されて居たのだ。時あつて幸運な航海者が、彼方此方あちこちに陸地を發見して、これは想像されて居る大陸の尖端すみだと思はれたこともある。然し、精しく調べて見ると、大陸だと思はれたものは、無數の島群たるに過ぎぬと云ふことが顯はれたり、堆積した氷山を陸地だと思つて命名したりしたのだ、と云ふことが知れた。だから其の後其處に行つて見ると、陸地の影は少しも無く、唯深い海が在るばかり、航海者は、何等の障礙を受くこと無く、其の上を航行することが出来ること云ふ珍妙な次第になつたこともあるのだ。然れば、御伽噺見たやうな南方の大陸と云ふものは、漸々其の姿が萎んで行つて、到頭彼の有名なクックが、南極地方を周航した曉、少しも陸地は無いと云ふことが愈々確實にな

ッて来た。

然し^{まづ}全て陸地が無いではない。今南極探検の歴史を回顧するに先ちて、一應^{まづ}今までに何んな陸地が発見せられたか、之を列挙して見るのも便利だらうと思はれる。

所謂南方大陸だと思はれて居た陸地の端^{はし}が、南極圏から出て居るのは、極めて僅かな所だけである。即ちアメリカの南端に向いて、一番遠く北の方に出て居るのがグラハム・ランドで、其の北東端のルイ・フィリップ・ランドは、殆ど南緯六十三度の所まで擴^{ひろ}がッて居る。又此のグラハム・ランドの前面に當りて、其の西方には、南シエトランド諸島とバーマー群島があり、北東には、南オークネー諸島、ジューヴィーユ島及び無數の小島がある。又グラハム・ランドの南西方南緯六十八度の所には、一千八百二十一年に、ベルリングスハウゼンが見たと云ふアレクサンデル第一世島があ

る。これは多分グラハム・ランドと續いてるものだらう。

同じく南緯六十八度の所で、遙か西方に當りて、ペテロ第一世と名の附いた小さい島がある。これは、ベルリングスハウゼンが発見したものである。

西經百五十度乃至百五十八度、南緯七十六度乃至七十八度の所には、スコットの率ゐたイギリスの探検隊が発見したエドワード第七世ランドがある。其の西方東經百六十度乃至百七十度の所には、ロッスの発見したヴィクトリア・ランドがある。一千九百〇二年、スコットは、此のヴィクトリア・ランドの岸に沿ひ、櫓に乗ッて南緯八十二度十七分の所まで行ッた。

南極圏内で東經百五十度乃至百度の所には、列を成した陸地が累り合ッて居る。之を西から北へと、アデリー・ランド、クラリー・ランド、ノース・ランド、サブリナール・ランド、ブット・ランド、ノックス・ランドと呼ん

て居る。之に接して、東經九十度の所に、一千九百〇二年、フォン・ドリ
ガルキの率ゐたドイツの探検隊が発見したカイゼル、キルヘルム第二世
ランドがある。

之に續いて、東經六十度にはケンプ・ランドがあり、東經五十度にはエン
デルビー・ランドがあり、西經二十度には、ブルースの率ゐたスコットラン
ドの南極探検隊が、一千九百〇四年に発見したコーツランドがある。之と
グラハム・ランドとは、遠く南方に航行の出来るエッデル海で分たれて居る。

南極の陸地と云ふ中には、準南極地方とも云ふべき幾多の島や群島が附
屬して居る。此等のものは、南緯六十度から五十度の間に散在してゐるので、
其の氣候の上の關係から言つて、南極の陸地に屬するものとせらるゝのだ。
此等の陸地を列挙して見ると、ホルン岬の東方、南緯五十四度西經三十
七度の所にある南ゲオルギア、南緯五十六度乃至五十九度、西經二十七度の

所に在るサンドキッチ群島、南アメリカとオーストラリアとの中間、南緯
五十八度西經百二十度の所に在るキーツ島、南緯五十六度東經百六十五度
の所に在るエメラルド島、南緯五十四度東經百六十度の所に在るマツカリ
ア諸島、オーストラリアと南アフリカとの中間、南緯四十九度乃至五十四
度、東經六十八度乃至七十四度の所に在るヘアード諸島及びマクドナル
ド諸島、喜望岬の南西、南緯五十四度東經四度の所にあるブーヴェル島で
ある。

南極地方の地質に就いては、吾人の知る所極めて不完全であるが、古生
岩（花崗石、片麻石、輝石板岩）及び砂岩と共に、新火成岩がある。其の
中でも、熔岩の様な物が一番廣く存在する。

南極地方で発見せられた活火山は二つある。一つはヴィクトリア・ラン
ドに在るエレブス山で、高さが三千八百八十九米^{メートル}、一つは南シエトランド

諸島中のデセプション島にあるものである。

第六章 探検初期

初期の南極探検は、悉く未知の南方大陸の有無を確定する爲めに行はれたものだ。

一千六百七十五年、ハンブルヒから出て行つた商業的探検隊を率ゐたアントニオ・デュ・ラ・ロシエは、南ゲオルギアを發見した。此の地は一千五百〇一年乃至五百〇二年の頃、アメリゴ・ヴェスプッチの發見したものである。ところが、其の當時には位置の測定が十分で無かつた爲め、其の後何處にあるやら解らなかつたのだ。

其の後六十二年を経て、新發見があつた。即ち一千七百三十八年、フランスの提督ロチェー・ブーヴェーは、其の名に依つて命名せられたブーヴェー群島に達した。ブーヴェーは、これが南極大陸の一端だと思つて居た。

一千七百七十二年には、マリヨン・デュ・フレンツェが、プリンス・エドワード諸島及びクロツェット諸島を発見し、同年に、ブレタニエの航海者ケルグエーレンは、政府派遣の探検隊を率ゐて、當時の人が信じて居た所に據ると、鬼の棲むやうな南國へと赴き、此處でケルグエーレン島に達した。此等の航海は、凡て南極圏内には這入つて居らぬので、其の先登者の名譽は、之を偉人クックに歸せねばならぬ。クックは、最初の探検航海者として、三度南極圏内に入り、狭義の南極地方、即ち眞の南極地方の発見をしやうと試みた。夫れて彼の第二回目の世界周航の際（一千七百七十二年——七十五年）、一千七百七十五年一月三十一日に南サンドキッチ諸島を発見した。此の時は、ドイツの博物學者ヨハン・ラインホルド・フォルステルと其の子ゲオルグ・フォルステルとが従うて行つた。又第三回の世界周航の時には、既に知られて居たプリンス・エドワード諸島及びケルグエーレ

諸島に行つて、一層委しく取調べた。夫れからクックは、太平洋のアジアとアメリカとに跨る極海の部分を航行し、ハワイで殺されたのは人の能く知る所だ。

クックは、南半球には廣大無邊の大洋が其の主な部分を占めて居て、大きな南方大陸などいふものは無いと云ふことを證明した。若し假に斯様なものがあるとすれば、南極圏内にあるより外は無いのだが、此の極圏内に關する知識は、生憎十分で無かつた。兎も角クックの報告は、南方の大洋に行かうと云ふ冒險心を減じた上、騒亂の時代が續いた爲め、爾後五十年間はクックの得た所だけで満足せねばならなんだ。抑、クックが達した最高緯度は、南緯七十一度十分で、當時にありては此以上南に行つたものはなかつたのだ。クックが此の緯度に達したのは、一千七百七十四年一月三十日である。

紀元第十九世紀の初めになつて、再び南極探検の時代が來た。今度は直接南極圏内、又は其の附近に活動することになつたので、之が爲め一時中絶して居た發見が再興せられることになり、其の結果、幾多の陸の相並んで居るのが發見せられたが、南極大陸と云ふものは、クックが思つて居たよりも、もつと狭い範圍のものとなつてしまつた。而して此等第十九世紀初頭の南極探検なるものは、主として漁獵家の力に藉つたものだ。

先づ、#リアム・スミスとブランドとは、一千八百十九年に、新南シエトランド諸島と、其の南方に横はる複雑な島群とを發見した。此の島群はデルク・ゲルリッツ群島と名づけられたのであるが、後に其の不穩當だといふことが解つた。と云ふのは他でも無いが、此の島をデルク・ゲルリッツと名づけたと云ふのは、オランダの航海者デルク・ゲルリッツに基くのだ。ところが、ゲルリッツは、一千五百九十九年に南緯五十六度の所ま

て來たのではあるが、其れから前へは進まなかつた。だから、南緯六十四度の所にある群島に彼の名を附けるといふことは、理由の無いことだと云ふ次第なのである。

斯くて、此の地方には高價な海犬屬が澤山居ると云ふことが知れ渡つて來ると同時に、アメリカやイギリスの漁獵家が、其の沿岸に群集して來て、其の或る者は陸地の探検に力を致したのもある。

ゼームズ・エツデル、バーマー、ポーエル等の徒は、遙か東方に延びて居る南オークネー諸島及びバーマー・ランドを發見した。此の時突然としてファビアン・ゴットフリーブ・ファン・ベルリングスハウゼン及びラツアレンの率ゐたロシアの探検隊が現はれて來た。

此の探検隊は、最も有名な南極探検隊中の一つで、一千八百十九年から二十一年に亘りて南極圏内を遍く周航し、一千八百二十年、先づ第一に雪

と氷で蔽はれたペテロ第一世島並にアレクサンデル第一世ランドを発見した。後者は見ただけで近づくことは出来無かつた。夫れから南サンドキツチ諸島を精査した際、サワドフスキ島に活火山があると云ふことも発見した。

此と同時代に、アメリカ人のモーレルが探検したと云ふのだが、南極通は此の事實を否認して居る。之に反して、彼の漁獵家エツデルが、極めて價値ある航行をなしたと云ふことは信すべきである。此の時エツデルは、南オークネー島を發し、氷の無い、船を通ずるに堪ふる海を通りて、南緯七十四度十五分まで進んだ。時正に一千八百二十三年である。但ヂュモン・ドゥルヴィーユは此の事實も疑ふべきであるとして居るが、是は間違つて居る。ドゥルヴィーユの疑を挟むと云ふのは、所謂エツデル海、即ちエツデルの通航した海を通つた時、非常な氷塊がありて航行困難であつた。こ

れはエツデルの言ふ所と相違すると云ふのが主な理由なのであるが、斯様な事は變り易い極地の氣候には有り勝ちの事て決して怪むには足らぬ。

斯くて成功したエツデルは、未だ南の方へと進みたかつたには相違無いが、船の工合や、船員が壞血病に罹つたことや、貯藏品の都合で、歸路が長くなることは都合が好く無いことになつた上、段々寒冷の時節に向うた爲め、引き返すことになつた。

ジョン・ビスコーは、一千八百三十一年乃至三十二年の間に、二隻の小さい船を率ゐ、險惡な境遇と戦ひながら、南方高緯度の所で極地の新周航を實行した。此の時彼は、マダガスカルから遙か南方に當りて、エンデルビーランドのあることを見た。此の陸地は高い氷壁となつて連続して居つた。又彼はグラハム・ランド及びビスコー諸島近傍の群島に達した。

一千八百三十三年、ケンプは、更に東方に横はるケンプ・ランドの高地

を發見し、バレーニイは、バレーニイ島と云ふ火山島とキルクス・ランドの一部などを發見した。此の時バレーニイ島の頂からは明かに煙の上るのが見えたと云ふ。又バレーニイの率ゐて行つた二隻の船の内一隻は、遂に踪跡不明となつたが、多分全乗組員と共に南極の激しい暴風雨の中に沈没したのであらう。

以上列記した地理學上の功績と云ふものは、凡て個人の計畫、若くは漁獵家の偶然の發見に歸せねばならぬ。此の漁獵家の發見は、南極の海をして繁榮な漁場と化せしめた。然れば、純粹に學術的に南極探検が計畫せられたことは無かつたのである。

ところが、彼の有名なドイツの數學者で且物理學者であるカルル・フリドリック・ヒ・ガウスが、地球磁力に關する有名な研究を發表して以來、南極の研究と云ふことが俄然として勃興して來た。加ふるにアレクサンデル・

フォン・フンボルトの力も與かつて、南半球にも磁力の觀察と云ふことが大仕掛に行はれるやうになつた。

一千八百三十八年から四十三年に至る五年間は、通常南極探検の隆盛期と唱へられて居るのだが、此の期間、殆ど同時に、三つの學術的探検隊が南極へ行くことになつた。

第一は、中尉チャールズ・キルクスの率ゐた五隻のアメリカ船から成り立つたもの。第二は、提督デューモン・ドゥアルヴィエの指揮の下に屬する二隻のコルヴェット型の船『アストロラーブ』號と『ゼレー』號と云ふのから成り立つて居るフランスの探検隊。第三は、ゼームス・クラーク・ロス及びフランス・クロヂエの率ゐた『エネプス』號と『テッロア』號と云ふ二隻のイギリス船から出來て居るものであつた。

キルクス中尉は、前年バレーニイの發見した海岸に沿うて二千三百^{キロメートル}程の

間も進んで行き、之を南極大陸だと命名した。時恰も一千四百年で、此の海岸は今日キルクス・ランドと云はれて居るものだ。此のキルクス・ランドは、キルクスの信じたやうに、實際連続した大陸であるのか、夫れとも、氷の爲めに繋がれて居る島群なのであるか、全て不明である。元來キルクスは、沿岸近く来たのでは無く、況して上陸して内地に這入り込み、其の陸地の状況などを明かにしたと云ふ譯では無いのだ。

一千八百三十八年、デュモン・ドゥルヴィエは、ルイ・フィリップ・ランドを發見した。これはディルク・ゲルリッツ群島の邊に在るので多數の氷河があつて、容易に近づくことの出来ぬ土地なのだ。又之と同時に、種々な南極大陸の断片と思はるゝもの、アデリー・ランドやクラリー・ランドなどを發見した。

前に述べた三つの中で、一番成功したのはイギリスの船であつた。イギ

リスの船は、氷海の巡航に適するやうに特別に建造せられたものである上に、其の構造が極めて優れたものであつた。ところがアメリカやフランスの船は、極地には不向きであつた上に、種々な點から言つても其の構造が十分で無かつたのだ。尤もアメリカとフランスの探検船が第一の目的とした所は、強ちに極地探検と云ふのでは無く、他の問題があつたので、極地探検と云ふことは第二の仕事となつて居たのだ。

ゼームス・クラーク・ロスは、其の伯父のジョン・ロスと區別する爲め、小ロスと呼ばれて居た。彼は、凡ての時代を通じて最も卓越した極地旅行家の一人であつて、北極及び南極の探検といふことは、自己の天職であり自己の責任であると云ふ位に思つて居た程の斯道の達人であつたのだ。

彼れロスは、一千八百四年四月十五日に生れ、幼にして海軍に籍を置き、

青年士官として既に早くも、ピョットの北極探検隊に従うて行くと云ふ光榮を有した。此の時ロツスは、其の伯父ジョン・ロツスを伴れて、彼の有名なポータリアに到る探検旅行に出掛けて行つたので、此の旅行の際、彼は非常の功を遂げた。第一に、ポータリアは島では無くつて、アメリカ大陸最北の突端であるといふこと。此のポータリアとアメリカ大陸とは、狭い地峡であると云ふことを確實にした事である。第二には、當時に於ける北磁極が北緯七十度五分西經九十六度四十六分の所に在ると云ふ事を發見したことだ。但以前に行つた極地探検家の磁力觀察に依るも、磁極の位置は此の邊だらうと云ふことは知れて居無かつた譯でも無いのだ。此の地點はポータリアの南西岸にある平たい、何等の特徴も無い濱であつて、何人も住まない『エスキモー』の小舎が二つ三つ海岸に見られるばかりであつた。ロツスは、信ずるに足る精密の程度で測定し、此の記憶すべき地をイギリス

スの有と祝し、『ユニオン、ジャック』を樹てた。而して近所に轉つて居た石灰石で石人形を造り、其の下に小箱の中に學術上の大發見に関する書類を入れて置いた。かくて、北磁極は確定せらるゝ事になつたのである。

北極探検の時にも、斯様な功績のあつた小ロツスである。南極探検に於ても、其の旅行記の編成や、學術上の結果の整理と云ふことに就いては、重要な仕事をして居る。彼は、優秀なる海洋學者、極地航海家と云ふばかりで無く、第一流の地球物理學者である。

小ロツスは、歸國の後大尉に昇進し、故國の沿岸測量を委任せられたが、一千八百三十九年になつて、政府派遣の南極探検隊を統率することになつた。其の當時南極に關することの知られて居たのは、極めて僅かなものであつて、南極圏内に這入つては、二三の所のことが知られて居たばかり、緯度の上から言つても、南緯七十四度を過ぎた邊が少し位解つて居たのだ。

之を、北極の方では、既に中世紀に於て『ノルマン』族が北緯七十三度のウヘルニヴィックまで行ッて居たと云ふ事と較べて見ると、非常な相違であると言はねばならぬ。

斯様な状態であつた所が、ロッスは、種々な発見をなし、又困難な境遇をも冒して種々な観察を非常に確實に行つたので、是れ迄のものは、白日に冲して群星其の光を失ふと云ふやうな調子であつた。ロッスの観察は、物理的地理學の凡ての方面に涉つたもので、今日に至るまで、南極地方に關する吾人の知識の大部分は、此のロッスの觀察に俟たねばならぬのである。

此のイギリスの探検隊は、三たびの大突進をやつて、雪と氷河で満たされた山地を見ることが出来た。即ちこれがヴィクトリア・ランドである。此の土地は氷壁に閉ぢられ、此の氷壁を通り抜けると云ふことは到底不可能

であつた。唯^{いかに}高い高い連山の頂が見えた。高さは三千五百米から四千二百米もあらう。其の中にメルボルン山が、威容堂々として聳えて居た。其處へ突如として現はれたのは、雪と氷とで蔽はれた圓錐體である。此の圓錐體からは煙と灰とが噴き出される。實にも斯かる高緯度の地にありて、思ひもかけざる壯觀！、これを即ち最初に発見せられた活火山で、高さ三千七百七十米、エンプス山と云ふのだ。其の近傍にある低い火山は、姉妹船の名に因んでテッロフ山と名けられたが、これは熄火山であつた。ロッスは、幸運にも、前人の未だ達したことのない南緯七十八度十分と云ふ所まで進んで行つた。此の時嘗て北磁極を発見したロッスは、又もや南磁極に近づいて居たので、磁針は殆んど八十九度と云ふ傾きを示して居た。

初めて陸地に近づいた時、テッロフ山の麓に方りて、低い白線がついて居り、此の白線は、東方の水平線に消え失せて、其の高さは五十米から百

米位あつた。これは垂直な氷壁であるので、南極地方には屢見られるもののである。唯帆檣の高さは、此の大氷壁の高さの半分にも足りないのであるから、其の氷壁の低い場所から、滑かな氷壁の表面を窺ふことが出来るのみであつた。此の觀察に依れば、其の表面は、目も届かぬ程の雪野であつて、其が漸々に高くなつて雪の連山に續いて居る。凡て突出した所からは、大きな氷柱が垂れて居た。彼な何物も棲まぬやうな地方でも、氷は時偶に融けるものと見える。元來南半球の一番暖かい月、即ち二月でも、此の地方の平均温度は零下八度なのだから猶ほ驚かざるを得ぬ。

斯くも數百^{キロメートル}の間、少しの罅隙も洞穴も無く引き續いて居る氷壁は、ロツスに取りては、非常な幻像であると思はれたので、幾度か其の終る所を究めんとした後、到頭イギリスに歸ることとなつた。但歸國するに先ちてルイ・フィリップ・ランドを究め、エッデル海を南方へと航行して見た。

以上の探検に當りて、全乗組員百五十二名の中、途中で死んだものは唯二人であつた。これは海の暴れた時波に浚はれて溺れたのである。彼のフランスの探検隊に死亡者が多かつたことなど、較べて見れば、非常の好成績と謂はねばならぬ。

ロツスの引率して歸つた二隻の船は、更にジョン・フランクリンとクロヂェとの指揮に屬し、キング・キリアム・ランドに向ふ北極探検の途に上ることとなつたが、此のフランクリンの北極探検は、其の結果の悲惨であつたので非常に有名なので、此の二隻の船も到頭行衛不明となつてしまつたのである。此の時ロツスも、フランクリン等の運命を明かにし、且は此等の人々に消息を齎らさんが爲め、北ソーメルセットの方に赴く救援探検隊の指揮者となつて非常に活動した。ロツスは、其の學術上の功績に對し、非常なる名聲を博して、一千八百六十二年四月三日に死んだ。

以上のアメリカ、フランス、イギリスの探検隊が、種々な発見をした後、是れまでに発見せられた海岸や島嶼を三つの重なる部分に分つことゝなつた。此の三つの部分は、約そアメリカ、アフリカ、オーストラリアの三大陸の南部と相對するもので、此の三部分の間には、多少の相違こそあれ、南極圏内まで及んで居る氷壁で結びつけられて居る。ところが不幸にも、北極地方に於けるフランクリンの探検隊問題が人心を奪うてしまつた爲め、廣大無邊の南極地方の未知境は、更に一層委しく調べられると云ふ暇が無かつた。

唯アメリカの漁獵家キリアム・ジョー・スマイリーは、未だロツスの生きて居る時分、ディルク・グレルリツツ群島で活動し、幾何かの成績を挙げ、一千八百四十五年にはモリア中尉が、ロツスの磁力觀察の缺けたるを補はんが爲め、エンデルビトランドの方へと赴いたが、氷の工合が大變に悪か

つたので、地理學上何等の結果も得ることが出来無かつたのだ。

其の後二十年経つて、有名な『チャレンジャー』號探検隊が出来た。之を率ゐたものはジー・エス・ネアースである。彼は一千八百七十五年乃至七十六年に至る間にイギリス政府から派遣せられた北極探検隊の船長ともなり、其の以前、フランクリンの北極探検にも與かつたことのある人である。『チャレンジャー』號探検隊を指揮して香港まで行つたのであるが、新しい北極探検隊に加はることゝなつたので香港から歸つた。

『チャレンジャー』號は、南極横斷の目的を抱いて出た最初の船で、一千八百七十四年二月十六日に出發した。最初の目的にも似ず、ケルゲエール島の南方、東經七十八度四十分、南緯六十度四十分まで行つただけであつた。但アウストラリアまで歸るのに高緯度の地を通過し、キルクスの所謂終端大陸の所在地だとせられて居る所から十五哩以内の所を航行したが、陸

地の影は認めなかつたと云ふ。此の際『チャレンジャー』號の發見した動物類の中には、北極地方に産するものと能く似てゐる種類のものが澤山あつた。然し北極地方のと全く同じであると云ふのは一つも無かつた。其れて兩極地方には同一の種類のものがあるのではあるまいか。而して其の中間にある海中には、之と同じ種類のものは無いのだらうと云ふやうな考が、生物學者間に議論の花を咲かせることになつた。此の他『チャレンジャー』號は、バーマー群島やグラハム・ランドで、二三地理學上の發見をした。

『チャレンジャー』號が南極に行つたと同じ南半球の夏に、タールマン船長は、捕鯨船『グリーンランド』號に乗つて、テイエラ・デル・フェゴの南、南極大陸の西岸に現はれた。此の人は北極地方には行つたことのあるハンブルヒ人であつて、此の後エニサイに赴いた商業的探検隊の長となり、又ドクトル・オットー・フィンシュと一緒に、ドイツ領ニューギニアの占領に

着手した人である。其の南極探検は、一千八百七十三年乃至七十四年までに行はれたもので、幾多の點に於て地圖の修正を試みしむるやうな有力な發見をした。グラハム・ランドやディルク・ゲルリッツ群島の地圖の如きは、之が爲め非常に改正せられることになつた。タールマンの發見中で一番主要なものは、ビスマルク海峡と云ふ一海峡を、南緯六十五度の所に發見したことである。此の海峡は、バーマー・ランドとグラハム・ランドとの間に通じてるものだと思はれる。

一千八百八十二年、萬國周極觀測の擧があるに當つて、其の學術的觀測所が、二箇所だけ南半球に設置せられた。これは、北極を圍繞せる十二箇所の觀測所から得た結果と比較する材料を得ようと云ふ譯であつたのだ。其の一つは、フランスの觀測者が之を管理し、南緯五十五度の所、テイエラ・デル・フェゴにあつた。猶ほ一つは、ドイツ人の管する所で、南緯五十

四度三分、南ゲオルギアのロイヤル灣にあつた。此等の所で行つた磁力並に氣象に關する觀測は、非常に重要なものである。

是から十年も経つて、漁獵家が南極の海洋を探し始め、之と同時に、南極探検が再び勃興して來た。これは、北方の海では既に漁り盡したから、段々に獲物が乏しくなる。だから、未だ手の着いて居らぬ南極の漁場に向ふと云ふ次第になつたのだ。

一千八百八十二年、四隻から組織されたスコットランドのダンディー捕鯨船隊は、ロッセが言つたやうに、眞正の鯨が南極にも棲むか如何かを取調べる爲めに出發した。其の四隻と云ふのは、『パレナ』號『アクチャー』號『ディアナ』號及び『ポーラー・スター』號である。此の四隻の中、『パレナ』號には博物學者キリアム・エス・ブルースが乗つて居り、『アクチャー』號には同じくドクトル・チャールズ・ダブリュー・ドーナルドが乗組んで居た。此

等の人は、王立地學協會評議員から選ばれて、其の學術上の研究をするこゝとなつたのだ。此の他畫家にして著述家たるバートン・ムルドックも便乗して居た。

斯くて四隻の船隊は、觀測や採集に必要な器械類を十分に用意して愈々出發して行つたが、其の結果は満足する程のものでは無かつた。其の主^{ウチ}に巡航した所はデイルク・ゲルリツ群島であつたのだ。其の間一頭の鯨も獲なかつたのである。又此の四隻の船は、凡てジョアンヴィーニ島及びビルイ・フィリップ・ランドの東方に眼を着けて居たので、南緯六十五度から南へは行かなかつた。此の時氷海は^{まよ}全て自由に航行が出来、幾多の水路が開けて居たのであつた。地圖の上に多少の修正を加へるやうな發見もあつたし、又學術上の研究をするに都合の好い少數の機會を利用することもせられた。

ノルエーの船長ラルセンは、右の捕鯨船隊と時を同じうして南極地方に出かけて行つたが、氷の都合が好かつた爲め、非常に有益な研究をするこゝとが出来た。ラルセンの乗つた船は、ハンブルヒ通運會社所屬の汽船「ヤソン」號であつた。此の船は少し前にナンセンと其の勇敢なる部下とを、グリーンランドに送り、彼の有名なる横断旅行を遂げさせたものである。ラルセンは、彼のダンデイーの捕鯨船隊と同じ方面の海に向つたが、南緯六十五度以南には行かなかつた。此の際ラルセンは上陸して種々な地點で化石を集めた。

一千八百九十三年乃至九十四年に、「ヤソン」號は、ノルエーの汽船「ヘルタ」號及び「カストル」號に伴はれて、再び南極に向つて行つた。「ヘルタ」號の船長はエヴェンセンであつた。此の時は南オークネー諸島の邊をアレクサンデル第一世ランドまで航行した。此等の船が氷海に這入つたのは、

67

南半球の夏の初め、即ち十一月であつた。「ヤソン」號に乗つて居た船長ラルセンは、グラハム・ランドの東岸南緯六十八度十分、西經六十度の地點まで赴いた。然し屢、其の岸を離るゝこと數哩であつた。且つ此の岸は堅固な氷壁で蔽はれて居り、グラハム・ランドなるものは、非常な氷河に満ち、澤山な「フヨルド」の灣入がある山地であつて、遠く南方に擴がって居る。北の方は、ディルク・ゲルリッツ群島の中に止まると云ふことを知つた。南緯六十六度の所にある此の陸中で一番高い突端をフラムテス岬と名づけた。此處から北の方へと還つて来て、リンデンベルヒ及びクリステンセンと云ふ二つの小さい島を發見した。此の二つの島は何れも活火山である。恐らく東西に走せて居る山脈と、アンデ連山の延びた所に横はつて居る山脈との交叉點になるものであらう。斯かる間に「ヘルタ」號の船長エヴェンセンは、一千八百九十三年十一月一日、南シエトランド島に達した。それか

らバリーランドの西岸に沿うて南方に進み、ビスコー島を過ぎ、少しも氷に出会はないで、十一月九日南極圏に達した。二十年前「チャレンヂャー」號以來、南極圏の横ぎられたのは之が始めてである。船長エヴェンセンは、アレクサンデル・ランドを瞥見したが、其の海岸に沿うて、これがグラハム・ランドと續いてるか何うか、と云ふことを究めるまでには到らなうだ。其の後氷流から左程困められると云ふことも無く、南緯六十九度十分、西經七十二度十二分と云ふ最南方に達した。夫れから、ティエラ・デル・フェゴを訪ね、「ヤソン」號及び「ヘルタ」號は、一月の終りの頃、南極の海へと歸つたが、ジョアンヴィーユ島以南には進まないで、歐洲に歸ることになつた。

斯様な次第で、漁獵探検隊は、南極圏内左程遠方までは行かなかつた。此の時に當つて、前の探検隊に遅れること二年、一千八百九十四年から九

十五年に亘りて、ノルエーの有名な捕鯨家スヴェンド・フォインは、其の所有船中の「アンタークティック」號を派遣し、ヴィクトリア・ランドの海岸を探らすことになつた。此の船長はブルと云ふ人で、深く南極圏内に這入つて行き、殊にゼームス・ロツスの調べた地方に進入した。此の時の乗組員中には、ノルエーの少壯學者チェー・エツゲベルヒ・ボルヒグレヴィンクが居た。是は單に博物學研究の一水夫としてであつた。斯くて、「アンタークティック」號は、一千八百九十四年九月に、メルボルンを出帆したが、一度修繕の爲めに引き返して、一千八百九十四年十一月二十八日、ニュー・ジラランドのシュワート島を離れることになり、十二月八日、南緯六十二度四十五分、東經百七十一度三十分の所で氷海に入り初めた。十二月十四日、バレー諸島を見、十六日ヴィクトリア・ランドのアデール岬を見た。一千八百九十五年一月二十二日には、南緯七十四度といふ最南地點クール

マン島に着いたが、此の時海上はまだ南へと航海することが出来た。同年一月の二十三日、船長並にボルヒグレヴィンクも交って居た小さい一隊は、アデル岬に近い地點に上陸した。恐らく南極大陸と思はれる陸地を踏んだのは、此等が初めての人であらう。歸航の際は、氷海を通るのに僅か六日しかかゝらなかつた。此のアデル岬に上陸した際、ボルヒグレヴィンクは、南極の陸地で始めての礦物と植物とを採集した。元來此の地方には、植物は無いものと思はれて居たのである。又、雪に蔽はれた山頂から非常に氷河が流れて居て、アデル岬附近にても二十を下らぬほどあつたと云ふ。此の氷河の中の一つは、熔岩で蔽はれ、其の下に厚い雪の層があり、又此の下には熔岩の層があると云ふ工合になつて居た。高さ二千四百米の火山ピクは、比較的雪が少なかつた。これは近頃まだ噴火して居た爲めなのだらうと思はれる。要するに、漁業と云ふ方面から言へば、此の航海に

しても、又以前の航海にしても、其の結果は左程のものでは無かつたので、之が爲めに、更に航海しようなど、云ふ程のことは無かつたのである。

加ふるに、大抵の南極探検隊と云ふものが、海獸捕獲の目的を第一として、學術上の目的は第二に置いて居た爲め、學術の方面から言へば、何か物足りない感じがした。假令航路は開けて居た所で、單ただこれだけの理由で前進すると云ふことは、船長の命を受けた所で無かつた。だからして、學術上非常に豊富な材料の獲られると云ふやうな場合に當つても、漁場が無いと云ふ理由の下に引き返したものだ。『アンタロクティック』號の航海に當つても、斯かる計畫で、實益と學術との一致することは困難であると云ふことを明かにした。だから、此の缺點を除くには、學術なら學術専門のものを作るより他は無ないのだ。ドイツのゲオルグ・フォン・ノイマイエルやイギリスのサー・ジョン・マーレーなどが、此の目的で學術的の協會を組

織して、政府の補助を求めて、南極の學術探検の機運を勃興させようとしたと云ふのは無理からぬ事だ。

元來ノイマイエルは、在ハンブルヒ、ドイツ海上監視所長で、年來南極の學術的探検が必要であると云ふことを感じて居たのだ。夫れて演説や著作で以て断えず此の意味を公にした。又實際に於ても、自然科学並に地學に對しては、何れの方面から言つても、南極地方には非常に大切な事が含まれて居るのである。然し、ノイマイエルの要求する方法を實行すると云ふには非常の手續がかかるので、彼の計畫が實現せられる迄にはならなかつた。一千八百九十五年ブレーメンで開かれた第十一回ドイツ地學協會大會で、漸くドイツ南極探検隊が、聊か具體的のものとなりかけた。

此の目的を實行する爲め、ノイマイエルを委員長とし、地理學者から委員を選んだ。此の委員は、學術上の目錄を編成し、費用の出途を作ると云

ふ任務を帯びて居たのだ。又一面イギリスに於ても、同じく一千八百九十五年、サー、クレメンス・マイカムは、王立地學協會々長並に萬國地學聯合會の會頭として、南極の學術的探検の必要を述べたので、南極地方に對する興味と云ふものが、文明國間に喚起せられることになつた。

此の時に當つて、他の方面から南極探検隊が現はれて來た。其れは他にも無い、アドリアン・デュ・ゼルラーシユの率ゐた『ヘルジカ』號探検隊である。此の探検隊と、ホルヒグレイソクスの第二回探検とは、近代の南極探検に於ける二偉業と謂はねばならぬのであるからして、更に項を改めて述べることにする。

第七章 一大探検 其の一

ゼルラーシュが『ベルジカ』號の探検隊を組織するに當つて、先づ困難を感じたのは資金であつた。其の爲め此の事業は殆ど絶望であると思はれた際に當つて、漸く政府から下賜金を得ることが出来たのであつた。

そこで、ノルエーの捕鯨船『バトリア』號を買入れて修繕を加へ、『ベルジカ』號と改名したのである。之に乗るべき學者及び乗組員は、半ばベルギー人で、半ば外國人であつた。今其の人名を列記すれば、次の通りである。

司令官 アドリアン・デュ・セルラーシュ(ベルギー人)

船長 ジョーヂルコアント(ベルギー人)(豫備士官にして海洋學者である。)

ロアルド・アムンドセン(ノルエー人)

磁氣學者 エミール・タンコ(ベルギー人)(死亡)

自然科学者 エミール・ラコヴィツア(ルーマニア人)

地質學者 ヘンリック・アルクトフスキ(ロシア人)(又海洋學者にして氣象學者である。)

氣象學者 アントイーネ・ド・ブラルスキ(ロシア人)

外科醫 フレデリック・エー・クック(アメリカ人)(又人類學者にして、寫真師である。)

此の他機關士、水夫等は之を略すとして、船がバンタ・アレナスを出る時には、總數十九人居たのである。

『ベルジカ』號は、一千八百九十七年八月十六日、アントエルプを出發し、マデーラに向つて大西洋を航し、是からリオ・デ・ジャネーロに行き、モンテヴィデオに南下し、マガリヤエンス海峡に入りて、バンタ・アレナスに

赴いた。夫れからフェギア海峡で暫時滞在し、ホルン岬邊のインド種族の間に生活し、一千八百九十八年一月十三日、スタイン島を去るに及んで、愈々未知の境に入ることになった。

後一週日、南シエトランド諸島を望む所に來た。此の時暴風雨の眞際中、ノルエー人の水夫キーンケと云ふ青年が、波に浚はれてしまつた。これからは、霧深くして始終暴れて居るブランスフィールド海峡を横ざり、一千八百九十八年一月二十三日、新陸地の端を見た。これがバーマー多島海である。此の中に入つて後、マガリヤエンス海峡と廣さが相似て居る水道のあるのを發見した。此の水道の東西兩側に當つて、約五百哩の間、從來見られなかつた陸地があつた。當時これが恐らく南極を圍繞する大陸の一部だと思はれて居た。此の陸地は仲夏の頃でも、厚い厚い氷に蔽はれて居たのである。此の海峡を過ぎて南太平洋に入り、グラハム・ランドの西

岸を航してアデレード島に着き、アレクサンデル島に赴いた後、氷塊の中を西方に横ざらうと企てた。

最初三週の間、行動の結果、新らしく發見せられた水道は、夏の間中、ブランスフィールド海峡から二百哩南西方に向ひ、太平洋に至る未知の陸地を過ぎて、通航自在であると云ふことが解つた。之を船の名に因んで、『ベルジカ』水道と命名した。此の東方に當つて高い連続した土地がある。これは多分グラハム・ランドに續いたものだらう。これは氷塊中に漂うて居た際に死んだダンコ中尉の名に因んで、ダンコ・ランドと命名した。恰度南緯七十一度三十六分の所である。

抑『ベルジカ』號が氷塊の中に突進したのは、二月二十八日であつたので、夫れから漸次進んで南緯七十一度三十分、西經八十五度十五分の所まで來たのは、三月の二日であつた。ところが其の翌日、船は氷塊の中に凍

結せられてしまひ、一個年以上も自由の行動をすることが出来ず、氷と一緒に、西經八十度三十分乃至百〇二度十分、南緯六十九度四十分乃至七十一度三十五分の間、漂うて居た。此の南緯七十一度三十五分の所に來たのは、一千八百九十八年五月三十一日で、これが『ベルジカ』號の到達した最高緯度であつた。七十日間太陽は昇らず、船員全部精神鬱屈して苦んだ。ドクトル、クックの說に、これは暗黒と不適當な食物との結果だと云ふ。即ちダンコ中尉が死んだのは此の時であつた。

ベルジカ海峽の西方にある陸地は、多數の海峽で島に分たれて居る。即ちバーマー多島海と云ふので、これは此の地を始めて見たアメリカの捕鯨家キャブテン、ナサニエル・バーマーの名に因んで斯く呼ばれるのである。又『ベルジカ』海峽には、約二百の島や、幾多の島群が散在して居り、其中で約五十だけは少しく大きい。此の島や岬や灣や臺地乃至は山嶽には、

此の探検隊に緣故のある名を附けた。

一千八百九十九年三月十三日には『ベルジカ』號は、南緯六十九度五十分、西經百〇二度十分の所に擱坐することになった。これも氷の爲めであるのだ。斯くて一千八百九十九年十月三十日、『ベルジカ』號は漸くフランスのフーロ・ギユ・シウル・メール港に着き、十一月五日、歡呼の聲に満たされた間を悠々としてアンヘル埠頭に入港し、尋いで十八日、ベルギー王國地學協會に莊重なる式場を設けて、同號乗組員一同を歡迎した。此の歡迎は往年スタンレトがコンゴの探検から歸つた時のものに亞いてであると云はれて居る。中部歐洲列國の各地學協會からも代表參列員を出したが、其中でも、パリの地學協會からは、ロラン・ポナバルト親王殿下が親臨せられた。當日歡迎會の席上、ルコアントは、探検の結果に就き、ゼルラ・イシユは、南極の氷塊に就いて説明し、且つ斬新な寫眞を幻燈に映して、

満場の會員を感歎させたと云ふことである。

元來此の探検隊は、費用が不足勝ちであつたのだらう、随分種々な困難も、且十分な點もあつたと云ふことは、事實である。又此の際使用した『ベルジカ』號は、噸數二百五十噸で、十年前に造られたものであつた。今其の探検の結果を一括して見ると、大約次の通りである。

- (一) ベルジカ海峡を發見した事。
- (二) アイアランド、シエトランドの島に關し、イギリス海軍省の海圖にある誤謬を訂正した事。
- (三) 探検隊の到達した邊で、海水溫度を測つたところが、遙か南方に大陸の在る模様だと云ふことが解つた事。
- (四) 南極特有の動植物に關する研究。
- (五) 未知の島嶼の發見。

まアゴツと斯んなものである。又同號の錘測に據ると、南洋で一番深い所は、南緯五十五度五十分、西經六十五度の所で、深さが四千四十呎ある所だ。これは今日までに知られた最深所である。

實に『ベルジカ』號の探検は、南極探検の第三勃興期を劃したものと謂つて差支は無い。是よりして今日に至るまで、南極探検は空前の盛況を呈しつつあるのである。

第八章 一大探検 其の二

ホルヒグレヴィンクの探検隊を組織しやうと志したのは、『バルジカ』號がベルギーに歸着した後の事、恰度『ヴァルディヴィア』號が歸つた頃の事であつた。斯くてホルヒグレヴィンクは、一千八百九十八年八月テムズ河を出帆した。其の乗船は『サウザン・クロッス』號と云ふ。此の船はノルエーの捕鯨船で、以前は『バルラックス』號と云つたものだ。簡單に此の船の構造を述べると、總噸數五百二十一噸七、登簿噸數二百七十六噸七二、長さ百四十六呎五、幅三十呎七、吃水十七呎六で、二重甲板である。船は圓くなつて居る船だ。ノルエーのアーレンダールで建造せられ、設計者は彼の有名な『フラーム』號を設計したコリン・アーチャーである。機關と汽鐘とは、同じくノルエー國フレデリッシュタットのダールに住むヨット。

エンセン及びアー・エンセンの造る所である。此の船がノルエーのクリステリアニアを出帆したのは、一千八百九十八年七月三十日であつた。

ホルヒグレヴィンクの第二回探検の出資者は、サー、デヨージ・ニューネスである。此の人はロンドンクの出版業者で、此の探検と云ふのも、一面學術的であると同時に、一面商業的であつたのだ。此の探検に加はつた人々には澤山な學者があつた。其の中には中尉コルベック、老練なる磁氣觀測者ルイス・ベルナッチ、生物學者エス・ハンソンとエチ・エヴァンス、及びドクトルクレヴシユタッドなどが居た。又約五十頭の犬を伴れて行つた。これはアデルル岬で上陸し、南磁極——これが恐らく地理學上の南極であらうと思はれる方へ、櫓を進んで行かうと云ふ計畫であつたのだ。

斯くて、『サウザン・クロッス』號は、一千八百九十八年十二月三十日、南緯五十二度、東經百五十四度の所で氷に出會ひ、一千八百九十九年一月

十四日、バレンー諸島中の一島を見た。夫れから約東經百六十四度の所を南進しやうとしたのだが、これは到頭不成功に終り、船は已む無く東の方へと追ひやられ、四十八日間氷に閉ぢられて居たが、南緯七十度、東經百七十四度の所で漸々氷塊から脱することが出来、アデル岬に達し、二月十七日ロバートソン灣に投錨した。夫れて初めての冬を、南極の陸地で過すこととなり、船は四月二日ニュージブランドへ歸つてしまふた。此の冬は極めて不愉快な冬で、烈しい東南東の暴風と南東の暴風とが暴れ廻つた。其の速度は、一時間百四十五軒キロメートルであつたと云ふ。又暴風雪が一週間も續いたことがあつて、南極で暮した日の二割六分は暴れ日であつたのだ。而して風の速力は、一時間六十軒以上であつたとの事である。天氣の工合が好い日には、沿岸五百軒の間、糧旅行をしたことが幾度もあつたが、甚しい罅裂わかれめがあり、大きな氷河に満ちて居る高臺の内部は、険しい岩壁と、高さ

四千米メートルにも超える山嶺との爲めに這入ることが出来なかつた。

元來冬營の小舎は、山に續いた険しい急斜面の麓、海岸にある小さい空地に建てられたのであつたが、ホルヒグレヴィンクは、内地の大平野の表面を蔽ふ大雪原に至るまで、斜面地を測定して行くと云ふことは、不可能だと信じて居た。だから、前に述べたやうに、沿岸に小旅行を試みるか、海中の氷塊に行つたと云ふことを除いては、冬營中、自然科学の材料を集めたり、氣象學や磁氣に關する觀察をして暮して居た。此の冬營は、人間あつてより、南極の陸地で初めての冬營であつたのだ。

一千九百年一月二十八日、『サウザン・クロッス』號は、アデル岬に歸つて、冬營隊を載せた。此の冬營隊の一人なる動物學者のニコライ・ハンソンは、既に冬營中に死歿したのであつた。斯くて、『サウザン・クロッス』號は、二月二日南方へと出發した。此處から船はヴィクトリア・ラン

ドの岸に沿うて進み、ボセツション島、クールマン島に上陸し、又、メルボルン山麓、フランクリン島等にも上陸した。二月十日にはクロヂェ岬の附近テルロア山麓に上陸した。此の地點から大氷壁に沿うて西經百六十四度十分まで東方に進んだ。此處に氷の中に『インレット』のあるのを發見した。二月十七日には、船は最高緯度の南緯七十八度三十四分の所に達したのである。

大氷壁はロツスの時よりも著しく小さくなり、幾らか南の方に移つて居た。ロツスの地圖に據ると、堅固な氷壁の在る所に、ボルヒグレヴィンクの地圖では、五千平方哩の開水海がある。ボルヒグレヴィンクは、長い長い漸次南へ向いて高くなつて居る氷壁の低い所を越え、櫓と犬と糧食と器械とを携へて上陸した。此の時ボルヒグレヴィンクと船長とは、殆ど生命を失ふ所であつた。これは氷河の爲めに生じた波があつたので、二人は喫

驚した機會に其の下に埋まつてしまつたのだ。然し、死力を出して巖に取り付き、其の頭よりも六米も高い流水の力から逃れることが出来たのである。

其處でボルヒグレヴィンクは、二人の従者を伴つて、有名な橇旅行の途に上り、南緯七十八度五十分まで行つた。ロツスが最南端に行つてから五十有七年、一千八百四十二年にロツスの行つた緯度よりも更に遠く出たので、是れまで人間の達し得た最南極端であつたのだ。又磁氣の測定は、新に南磁極の位置を定めたのであるが、實際其の場所へ行くことは出来なかつた。

此の探検に依ると、ザイクトリア・ランドは、火成岩様の岩から出来て居る山地で、其の荒蕪たる氷原からは、無数の大氷河を海に送つて居る。エンプス山は未だ噴火して居り、全海岸は、遠く南方に續く點線のやうに

思はれた。

又ベルギー探検隊は、グラハム・ランドの夏季中、主として陸地から吹く南風の下に居たのだが、アデル岬では、年中南風が吹いて、温度は零下四十六度六まで降下した。

是れて観れば、ヴィクトリア・ランドは一層南極の東半球部に近いと云ふ譯で、南極の陸地が、主として東半球にあると云ふ新しい證據になる。要するに、此の探検隊は非常に有力な成績と經驗とをしたもので、後來の企圖に對して、極めて有益なものであるのだ。斯くて『サウザン・クロス』號は、二月十九日歸航の途に就き、氷塊にも出會はず、三月三十日ニュージブランドのステュワート島に着いた。

或は以上の記事と重複するかも知れぬが、一千八百九十九年六月二十三日、ホルヒグレヴィンクが、ロンドン地學協會例會で講演した所を左に摘

記する。

探検隊は、一千八百九十八年十二月三十日、北緯五十一度五十分、東經百五十三度五十分の所で初めて氷塊を見た。それから一千八百九十九年二月十七日、ヴィクトリア・ランドに於ける根據地として撰んだロバートソン灣に着いて、直ぐに駐在所に持つて行つた器械材料の裝置建設に着手した。三月一日、『サウザン・クロス』號は、ニュージブランドで準備を調へる爲めに北方に向つて去つた。探検隊では、ホルヒグレヴィンクの外、海軍中尉タブリー・コルベックが、磁氣の觀測をなし、ニコラス・ハンソンは動物學、ドクトル、エッチ・クロシュタットとフリユー・エヴァンスとは動物學、ルイス・ベルナッチは星學を擔任した。

秋季と冬季とは、此の駐在所や其の附近で科學的研究をしたが成功した。殊に氣象觀測に重きを置き、南極大陸の氣候に就いては、重要なる

南極探検

知識を得た。観測中の最低空気温度は八月に於ける零下四十六度で、旋風が吹いて激烈を極め、一番勢力の強かつた時は、一時間一千〇八十米の速力であつた。

冬季の間、種々の探検旅行をしたが、内地は、凸凹の澤山ある爲め、深く這入り込むことが出来なんだ。ロバートソン灣の附近でも、高さが三千六百米ある。此の山地一面は、絶壁や罅隙の澤山ある氷河で掩はれて居るが、ホルヒグレヴィンクは、漸々の事で、サヴァイン山の附近まで行つた。

一千九百年二月二十八日、海面の凍氷が融解して航行自由となり、三月二十八日『サウザン・クロス』號が着いて、探検隊一同を載せ、六十年の昔サー・ゼームス・ロックスが開いた航路を辿つて南方に向つた。其の途次クイルマン群島やテッロア山の麓を一巡して、南緯七十八度三十

四分の所に達し、此の地で上陸したが、ホルヒグレヴィンクは、南緯七十八度五十分の所まで行つた。云々。
序に此の探検隊がリドリ岬に居た時の食物の献立を示して置かう。

朝食 晝食 夕食

日曜日

- バター麵包
 - 茶及び珈琲
 - チーズ
 - 鯡
 - 鰯
- ココア
 - ビスケット
 - 牛舌
 - チーズ
 - シヤム
 - 果菜
- アツソータッド・スープ
 - 蒸し肉
 - ライスカレー
 - 乾馬鈴薯
 - 肉粥

月曜日

- 肉粥
 - バター麵包
 - 鹽豚肉
 - 茶及び珈琲
- ココア
 - ハム
 - 船用ビスケット
 - シヤム
 - 果菜
- ミルク・スープ
 - 乾魚
 - 罐詰馬鈴薯

火曜日

第八章 二大探検

- 肉粥
- ココア
- スキート・スープ

南極探検

ハム
バター麵包
茶及び珈琲

水曜日

肉粥
鹽豚肉
バター麵包
茶及び珈琲

木曜日

肉粥
ハム
バター麵包
茶及び珈琲

船用ビスケット

餅

餅

チーズ

シヤム

果菜

ココア

船用ビスケット

ハム

チーズ

シヤム

果菜

ココア

船用ビスケット

餅

餅

チーズ

シヤム

罐詰豚肝

乾馬鈴薯

乾野菜

罐詰梅餛飩

ミルク・スープ

罐詰鮭

蒸し馬鈴薯

豆

鹽肉

乾馬鈴薯

乾野菜

金曜日

肉粥
ハム
バター麵包

果菜

ココア

船用ビスケット

ハム

茶及び珈琲

シヤム

果菜

ココア

船用ビスケット

餅

餅

チーズ

シヤム

果菜

ミルク・スープ

乾魚

蒸し馬鈴薯

チーズ

スキート・スープ

船用ビスケット

土曜日

肉粥
ハム
バター麵包

第八章 二大探検

第九章 二國競争 其の一

斯かる有力な探検に引き續いて續々と南極の探検が行はれるようになった。動物學者のカルル・チューンは、ドイツ深海探検隊を組織して之が隊長となり、汽船『ヴァルデイア』號に乗って、世界大周航を行つた時、アフリカ南方の海面に進航して行き、長い間探されて居たブーヴェー島を尋ね出した。此の島は二隻のイギリス捕鯨船が二度見たと云ふにも拘はらず、クックやロックスやモーアは、飽くまで隠れてしまつたものだと思つて居たのだ。夫れだから、誰も此の島の現在すると云ふことを疑つて居り、多分火山の爆發か、怒濤の力の爲めに消滅したのだらうと假定して居たのである。不幸にして暴風雨や濃霧や氷山のあつた爲め、之に近づくことは困難であつたので、氷に取り巻かれ、至て氷河になつて居る此の火山島に

上陸すると云ふことは、全然不可能であつた。

此處から猶ほ進んで行つた曉、エンダービー・ランドの水塊の終端の所に來て、之に沿うて驚くべき新發見をした。幾度か錘測をやつた結果に據ると、大抵五千米以上であつて、四千米以下など云ふことはない。是れで觀ると、南極海は、皆人の思つて居たやうな淺い海では無くつて、深海だといふことは争はれぬ事實となつた。此の點から言へば、ドイツ深海探検隊は、ナンセンの探検が、北極海は淺いものだといふ迷夢を打破したやうに、南極海に關する從來の謬見を改造したのである。斯くて『ヴァルデイア』號の航海は、將來ドイツ南極探検隊の先驅となる天命を帯びて居たので、ドイツの南極探検隊なるものは、皇帝、政府、議會の助力を得て成立せられることになつたのである。

一千八百九十九年、ドイツ帝國政府は、南極探検隊の組織に要する經費

の協賛を議會に求めたところが、それが通過したので、同年の末、探検に用ふる特別な装置した船を、キール造船所で建造することにした。此の船は、流水の間を航行するに當って、船體が安全であり、且つ必要なだけの弾力を有たす爲めに木材で造ることになつた。其の大きさは、彼の有名な『フラインム』號よりも少し狭くて長くした。これは、南極洋に於ける遠洋航海の時や、暴風の場合に都合が好いやうにとの爲めてあつたのだ。下甲板は吃水線位の所に在り。船首と船尾とは、銅鐵の板で蔽はれて居る。船の長さ四十六米、幅十米乃至十一米であつて、吃水は約五米である。又其の船内の構造は、三箇年間十分堪へ得るだけの薪炭や食料を貯蔵することが出来るやうになつて居る。五名の學者、五名の船員と、二十人の水夫を容れるだけの起臥室と研究室とがある。船は、七節の速力を出すことの出来る汽鍋で運轉し、電燈の設備もある。此の船は純然たる汽船なのであるが、

帆でも航行することが出来るやうになつて居る。これが則ち有名の『ガウス』號である。

本探検隊の豫定に依れば、凡ての研究に便利な航路を選ぶ等なので、ケルグエール島を起點とし、それから南極地方へ進む。先づ同島から東へ約九十度の經線の所まで進み、其の航路中、從來錘測の不足して居る場所の測量をする。又、存否不明のターミニノーション島の近海を南に進んで、ヴィクトリア・ランドに行き、能ふべくんば、此の地とケンプス・ランドとエンダービー・ランドとが續いて居るかどうかと云ふことを確かめて後、南極大陸の沿岸を廻り、大西洋の方に出て、エッデル海を探り、ヴィクトリア・ランドの西岸に一駐在所を造りて、一年間此處に滞在し、一つの島、又は群島の中に這入つて十分な研究をする。又ケルグエール島にも一箇の駐在所を造ると云ふ筈であつた。

以上は、航路の豫定であるが、其の研究すべき學科の豫定は、

- (一) 地理學、(二) 海洋學、(三) 測地學、(四) 地質學並に化學、(五) 古生物學、(六) 動植物學、(七) 醫學、(八) 氣象學、(九) 鑛氣並に地震、(十) 星學であつた。

以上の如き堂々たる豫定計畫をして、探検船『ガウス』號は、一千九百一年八月十一日キールを出發した。これが隊長たるものは、實にドクトル、エリッヒ・フォン・ドリガルスキー教授である。教授は當時柏林大學に教鞭を執つて居た有名なグリーンランド研究者で、一千八百九十一年及び一千八百九十二年乃至九十三年に、伯林地學協會がグリーンランドの内地の氷の移動状態を取調べる爲め、二回の學術的探検隊を出した時にも、バシオン、ヴァンヘッフエン、シュターデなど之が指揮に任じ、非常に功績のあつた人である。此の他ドクトル、エルンスト・ヴァンヘッフエンは動植物學、ドクトル、ハンス・ガツェルトは醫學並に細菌學、ドクトル、エミ

ール・フィリップは地質學と化學とを擔任し、猶ほ夫々専門の學者が各部門を擔任した。ドリガルスキー自身は地文學の擔任であつた。又船長はハンス・ルーゼルである。又『デイスカヴァリー』號と違つて船には軍艦旗を掲げて居たが、水夫は凡て商船に居たものであつた。

『ガウス』號は、一千九百一年十一月二十三日、ケーブ、タウンに着いた。夫れから數日經つてケルグエーレ島に向つて出發した。ケルグエーレ島には、駐在分所を置き、地磁學者のカー・ルイケン、氣象學者のヨット・エンツェンスベルグル、生物學者のエー・エルトを留め、貯藏品を積み込んだ上、一千九百二年一月の末、エンダービー・ランド附近に於ける全然不明の南極區域を通過し、出来るだけ南方に進み、歸航の際にも續行すべき各種の觀察をなさんものと、南に向つて出發した。

やがて新年となれば、橈を犬に牽かせて南極に突進し、秋に入つてから、

他の路を通って磁極の方に進み、ヴィクトリア・ランド及びキルクス・ランドと、ケンプ・ランド及びエンダービー・ランドとの関係の有無を取調べ、それから南極を廻って大西洋の方面に出て、デイルク・ゲルリッツ多島海に赴かうとの事であつた。だからして、ケルグエトレ島は、其中継場所を選ばれたのである。これには種々理由があるが、第一は、此の島には未だ真面目な取調がしてないと云ふこと。第二は、『カッセル』號及び『ヴァルデイヴィア』號の行った海洋學上の研究を續け、其の不足を補はうといふこと。第三は、島群附近で觀た氷の工合が、翌年にもなれば、航海に都合が好いらしく思はれたといふこと。此の三つである。

斯くて『ガウス』號は南緯六十六度二分、西經八十九度四十八分の所に發見せられた新陸地のボサドフスキ灣で越冬した。越冬中、船體は、厚さ三十呎の氷の中に鎖され、三十呎から四十呎位の積雪の爲め其の上を蔽は

れた。其の間數回の探検隊を上陸させたが、何れも好結果を収めたのである。磁氣並に氣象學上の觀察は、ニュージブランドのリットルトン及びアルヘンティナのスターテン島で行つたものと比較せられた。

氷が破れた後、一千九百〇二年一月三十日、西方へと海岸を縫うて歸る途上、セント・パウル及びニュー・アムステルの兩島を訪ねた。

第十章 三國競争 其の二

一面ドイツに於て斯かる大袈裟な探検隊が派遣せられると同時に、イギリスに於ても亦、一大探検隊の組織を見るようになった。

其の主唱者はロンドン地學協會であつた。主として地理、地質、海洋、航海、動植物、氣象、數學、其の他の學術に裨益しようとするのが大目的であつたのである。夫れて其の補助を請願したのであるが、時の總理大臣サリスベリーは、其の目的には賛成するが、補助は出来ぬと言ふ。海軍省も、亦海軍將校や水夫其の他艦船等一切のものを貸與せぬと言ふ。ところが、元來ドイツの地學協會からも交渉があつて、共同事業として南極の學術的探検をやらうては無いかと言つて遣したやうな場合にはあるし、南極探検といふは、實際諸種の科學に大關係のあることなのだから、斯かる當局者の

態度に對して、地學協會は憤然として起つた。抑、學海の淵源たる南極の探検を、一小船「ベルジカ」號に任すなど、云ふことは學界の不面目である。可矣、政府が補助せぬと云ふのなら構はぬ、一切私人の篤志に俟つことにすると云ふ大變な意氣込みであつた。爲めに其の後、多少有志の義捐が無いもなかつたが、豫算額五萬磅(約五十萬圓)に對しては甚だ少額のものたるに過ぎなかつた。そこで如何にしても金が無くては動けぬ。地學協會も聊か絶望の状態であつたのだが、恰度そこへもつて來て、イギリス化學協會副會頭ジョージ・ディクソン・ロングスタッフの令息レエルリン・ロングスタッフが、義侠心を出し、一千九百年三月二十二日、二萬五千磅の私財を擲つて、探検隊に寄附しようとして申込んだ。此の勢に驅られて續々寄附の申込者が出來、ホームズ・ワースの如きも五千磅を寄附し、殆ど豫定の額に達したのである。

ところが、今度は地學協會の方で、これだけでは満足が出来ぬとなつた。是非政府から補助さして、もっと大仕掛の探検隊を出さうといふことになり、衆議一決して代表委員を差遣し、政府に請願を提出することになつた。代表委員は、六月二十二日を以て、時の大藏大臣バルフォアに面會し、是非共南極探検に補助費を出せといふことを縷々陳述した。其の代表委員中には、ノーザムバールランド公、ローズ伯を始め、ロード、ケルゼイン、ジョージ・ガブリエル・ストークス、クレメント・マーカーカム、ゼヨセフ・マーカーなど總員四十六名で、日本に来て居たエッキング教授なども居り、悉く碩學鴻儒の連中であつた。其の請願書の大要を摘まんで言つて見ると、斯うなのだ。

一千八百九十七年總理大臣に請願した時は、本國と濠洲と協力することの出来ぬ事情があつたのだから仕方が無いが、今は江湖の同情を得て四萬

磅といふ基金も出来、差し當り探検費用の大部分を支辨することは出来るのであるが、もっと大きな完全な探検隊を組織したい。元來此の探検は、嘗て政府が派遣したものと同じ目的のものであるし、エールス親王は主保護者となり、ヨーク公は副保護者となつて居るといふ勢なのだから、一般輿論の趨く所はこれでも明かだ。此の上は政府が六萬磅だけ支出して呉れば可いのだ。

元來此の探検には二三年かゝるだらう。其の主目的は、未見未知の新陸地の地學的探検を始めとし、磁氣、氣象、生物學、深海測量、浚泥等であり。但磁氣の觀測に就いては、特別に之に適するやうに船を造らねばならぬ。偕て、三個年間の經費を概算すれば、次の通りである。

適當なる船艦築造費

三五、〇〇〇

磅

備品

四、〇〇〇

南極探検

報酬及び諸給

二〇、〇〇〇

石炭及び其の他

一〇、〇〇〇

上陸隊費

六、〇〇〇

臨時費

一〇、〇〇〇

總計

一〇〇、〇〇〇

又海軍省からは研究に必要な器具を貸與して貰ふ。唯現在の基金四萬磅に對する不足額の補充を議會に諮詢して貰へば可いのだ。是れも一度にといふのが困難なら、四五箇年間の繼續費としてゞも可い、兎も角此の計畫が實行出来れば苦情は無い。

請願書の意味は、大約前の通りである。而して其の署名者は、諸學會の會頭、ケンブリッジ、オックスフォード、乃至はロンドンの大學の學長始め、苟くも科學界に於て知名の士と呼ばれ得るものを網羅し盡して居たの

で、恰もイギリス科學者の大同團結たるの觀があり、以て優に政府を左右し得るの狀勢であつた。

偕て、大藏大臣バルフォアとの會見の時には、クレメント・マーカム、ジョセフ・フリーカーを筆頭として、痛快に南極探検の已むべからざる舉であるといふことを陳述し、ドイツの探検隊から交渉のあつた今日、一步も譲ることは出来ぬといふ事情を沿々として説いたのである。バルフォアは、即答することは出来ぬが、自分も此の舉には賛成であるから、何とか十分盡力しようといふことを答へて、代表委員一同は退散した。越えて七月三日、大藏大臣からの回答があり、四萬五千磅を補助費として支出するの件を議會に諮ることに決したが、一時に支出することは困難であるから、一千九百年度から四箇年の繼續費とすると云ふ意味であつた。

愈々探検が實行せられることになつた。船はダンディーで建造した約七

百噸の木船であつて、『デイスカヴァリー』と命名せられた。補助機關を有つて居る帆船で、全然磁氣を感じ無いやうに造られて居たから、他からの影響を蒙らないで磁氣の觀測をすることが出来るやうになつて居たのである。大體の計畫は、エレブス山下に駐在所を設けて、此處から南磁極へ突進しようとするのだ。越冬した後に、南極の氷塊以外にある港に居る『デイスカヴァリー』號が歸つて来て、探検隊一行を載せ、繫留氣球を利用して、グイクトリア・ランドの東方に在る大きな氷壁、キルクス・ランドの種々な複雑になつて居る状態などを調べよう。又第三回の冬を越した後は、太平洋方面の南極陸地沿岸を巡つて歸航の途に上らうと云ふのであつた。斯くて準備は調うたが、此の探検隊の學術的方面の指導者たるべきグレゴリーが辭することになつたのは、不幸なことであつた。グレゴリーは、コーンエド探検隊の時、ケニア登山と、スピッツベルゲン島内地の氷を研究した

ので有名な人だ。ところが右の次第になつた上、時日の暇が無かつたから、其の代理者となつて學術上の指導をする人を選ぶの餘裕が無く、全探検隊は、海軍將校のロバート・エフ・スコットが指揮することになつた。其の他、海軍將校數人が居て、其の中には後に有名なシャックルトン中尉も居た。又四十名の水夫は、殆ど全部海軍出身の水夫であつた。學術の方面から言ふと、ドクトル、ケトツツが居た。此の人は同じ乗組のアーミティヂ中尉と一所に、ジャクソン——ハムワース北極探検隊について行つた人である。又『サウザン・クロス』號でホルヒグレヴィンクと一緒に行つた氣象學者のルイス・ベルナツチも居た。此の他ドルトル・キルスン、ドクトル・ホッヂソン、フェラーなどが居た。學術の方面を監督して居るジョーヂ・マーレーは、ケープ・タウンまで一緒に行つた。ドクトル・ミルも海洋學研究の爲め、途中まで一緒に行つた。

そこで一千九百〇一年八月六日、『デイスカヴァリー』號はカウエスを發し、十月十四日シムソン灣に入り、ニュージールランドに向ふ途中、氷塊中のものとなつた。後ロツス海に入つて、エレブス島に駐在所を置き、一千九百〇二年一月、エドワード第七世王ランドを發見した。彼の駐在所からは、幾多の櫓隊が派遣せられ、スコットは、二人の同行者を伴れて南方に向ひ、南緯八十二度十七分に達した。時恰も一千九百〇二年十二月二十九日であつた。又西方に向つては、ヴィクトリア・ランドの高さ二千七百米の高原を越えて、東經百六十四度三十分の所まで行つたが、途中、磁氣の感ぜぬ地點東經百五十五度三十分の所を通り過ぎた。一千九百〇四年二月、『デイスカヴァリー』號は、マックマード海峡に於ける各營地を離れ、救助の爲めに來た『テラノヴァ』號及び『モーニング』號と一緒に歸途に着いた。此の二隻の救助船は、一千九百〇三年十二月六日タスマニアのホバート・タウ

ンを拔錨し、一千九百〇四年二月十四日、『デイスカヴァリー』號が氷に鎖されて居る所に着き、十八哩の間の堅氷を破つて之を救ひ出したのである。此の際ヴィクトリア・ランド一帯の地は、九千呎内外の高地が續いて、大陸性の高原らしいと云ふことを確めることが出來たのと、一つは海圖にあるキルクス・ランドの位置が進んで居たといふことである。

『デイスカヴァリー』號は、同年九月十二日、イギリスのポーツマスに歸つた。探検隊一同は、同地市民の盛大なる歓迎に招待せられ、ロンドンでも亦盛んな歓迎を受けた。イギリス皇帝は、探検隊の功績を嘉賞して、同隊の爲めに特別の賞牌を鑄ることを命ぜられ、スコット中佐は大佐に昇任せられた。

スコット大佐の南極探検實記は、有名なる、同氏の著『デイスカヴァリー號の航海』、其の他の書に據りて、明治四十三年九月、内外出版協會にて出版す。

第十一章 三國競争 其の三

斯様にイギリスからもドイツからも、堂々たる探検隊が出る此の時に當りて、冒險心に富むことを以て稱せらるゝスカンディナヴィアの半島、いかでか黙して已むべき、是に於て乎起つた人がある。即ちオットー・ノルデンショルドである。これは彼の北極探検で有名なノルデンショルドの甥だ。

ノルデンショルドの用ゐた船は、捕鯨船の『アンタクトティック』號である。此の船は極地探検では有名な船だ。船は、一千九百〇一年十月二十六日フアルマウスを出發した。此の船には船長ラルセン以下、動物學者ドクトル・アーオーリン、カー・アンデルソン、植物學者チェー・スコツツベルグ、氣象學者兼海洋學者ドクトル・ゲー・ポードマン、醫師ドクトル・エ

ケレエーフなどが乗つて居た。其の目的は、グラハム・ランドで冬籠りをし、其の附近でドイツ及びイギリスの兩探検隊と力を協せ、冬期間の氣象と磁氣觀測とを行ひ、夏になれば更に廣い區域で地理學や其の他科學上の探検をしようといふのであつた。

船はヴェノス・アイレスに至り、十二月二十四日此の地を去つて、テイエラ・デル・フェゴのポート・スタンリーに行つた。此の地には、アルヘンテナ政府の好意で、南極探検隊派遣中開かれて居た氣象並に磁氣の觀測所があつた。一千九百〇一年一月一日、南シエトランドの附近に達し、ヘルソン島(ハーモニー・コーヴ)に上陸した。此の地は僅に小さい面積の所だけが氷の上に出て居たばかりなのだが、博物學者は蘚苔類や石松類を採集し、これが同地唯一の植物であると斷定した。岩は、ポーヒリー山の熔岩から出來て居り、多分中生代に噴出したものだらうと云ふ。

ノルデンシヨルドの一行は、ネルソン島から南に向って進み、オルレア
ンス海峡に向いて行つた。此の海峡は、嘗てデュモン・ドゥルヴィエが
此の地方を探検した時、濃霧の中に遠方から望みて、遙か南方に開いたも
のだと思つて居たのだが、今回の探検で見ると、然うでは無くて、西南西
に延びて居る。斯くて此の海峡からゼララッシュ海峡の東北の口に達した。
此の海峡の南側を限つた陸地には、一つの水道も鑽入しては居らぬと云ふ
ことが明白になつたので、従來の『ベルジカ』號探検の結果の地圖には、多
大の訂正を要することになつた。

此の探検の結果として、ルイス・フィリップ・ランドは、ダンコ・ランド
とグラハム・ランドとの兩地の北東端なのだといふことが解つた。又、ゼ
ララッシュが想像して居たやうに、バーマー・ランドは一つの島地である
と云ふことが判然した。

探検隊は、此の地點から逆航し、ルイス・フィリップ・ランドの北側に沿
うて進み、夫れから此の地とジョアンヴィーユ島との中間の海峡を通つた
ところが、此の地方でも、舊い地圖の不精確なといふことを發見した。夫
れから南に進み、南緯六十六度まで行つたところが、凍氷の爲め、更に南
方に進むことが出来無かつたから、此處で海洋學の研究をした。此の地に留
まつて居た間見た所に據ると、南緯六十六度の地點では、一つの岬が流水
の北限に沿うて東の方に突出して居り、且海中にある臺原の幅は大變に廣
くつて、一千里の同深線が、海岸線から百二十哩の海上にある。此の淺水
地帯では、水の溫度が非常に低く、四百米乃至五百米に至る水層にて零度
である。ところが、此の海中臺原の區域を離れて、其の區域外に出ると、
直ぐに三千米乃至四千米の深さがあつて、西經四十五度の方に向いて、一
つの深い溝を成して居るらしい。西經四十五度と云ふのは、此の探検隊が

錘測した最東點であるのだが、此の錘測の結果からして、サー・ジョン・マレーが發見した深溝があると云ふことは、愈々確實になつた。此の邊の水温は、海面から百七十五米の深さまでは、零度以下で、海底は五度乃至零下七度である。東に進むに従うて水温が増すらしい。又一千八百二十三年、エッデルが發見した温水層は、南緯七十四度まで擴がって居るのか、或は一層高温な温水層があるのだらうと思はれる。

以上の研究を終つた後、北方に歸つてルイス・フィリップ・ランドのシームアール岬に着き、此の地に冬期滞在の根據地を置き、駐在所を建設した。駐在員は、隊長ノルデンシヨルドの外に、ドクトル・ボドマン、リプラル・エケレフと、他に水兵二人であつた。『アンタクトティック』號は、殘餘の隊員一同を乗せて、南ゲオルギアとファルク・ランドとの間を探検する筈で北航し、ファルク・ランドに着いた。一千九百〇二年四月十一日、本船

乗組の五名の博物學者は、本船を去つて南ゲオルギアに行き、約二箇月間此の地に滞在し、同島の完全な地圖を作製し、又同島最大の灣カンバーランド灣の植物學探検を遂げ、二千七百米の深さまで探海し、五千九百九十七米の深底に錘測を施した。七月四日、探検隊は、ファルク・ランドに歸り、夏期と秋期とは、南ゲオルギア島並にティエラ・デル・フェゴで科學的調査をしたが、『アンタクトティック』號は、ノルデンシヨルドの一行を乗せる爲めに、再び南に向つて航行した。

ところが、一千九百〇四年二月十二日、アンバステラー灣で氷に衝突し、船體は破碎沈没したものであるからして、船員は危険な航行をすること十六日、グリーン島に着き、同地で冬籠りしたのを、アルヘンティナ共和國の軍艦『ウルグアイ』號に、ルイス・フィリップ・ランドで助けられた。

此のノルデンシヨルドの探検は、南極探検隊中、特筆すべきものの一つ

て、此の探検隊に於ける古生物學上の發見は、南極古生物學上に一大曙光を放ち、一新紀を開いたのである。即ち其の結果として、朱羅期から第四紀に至る各地層があると云ふことを知ることが出来た。アンデルソンは、ゼルラーシユ海峡の入り口の北東から、ジョアンヴィーユ島、ダンディー島の諸島までのグラハム・ランド全體の地質圖を調製した。此の圖を見ると、此の地方は西から東に向いて三帯に區別せられて居るやうだ。第一帯は、皺が澤山ある山地で、一部分は水成岩から出来て居り、大部分は迸發岩から出来て居て、花崗岩から『カスク』岩に至る諸岩石がある。南米のマガリヤエンス沃地の西部マルデイレラと密接の關係がある。第二帯はロス島とヴェガ島との二つで、玄武岩や凝灰岩の臺地から出来て居り、岩脈の迸發及び玄武岩の流曳がある。海岸に向いて峭壁を成して居て、臺地の上は氷で掩はれ、地層はグラハム・ランドのデュークス灣の兩岸にあるのと

同じだ。第三帯は、白堊期及び第三紀層から出来て居るアドミラル、テイ・サウンド、スノー・ヒル諸島、シーモア諸島等である。此の邊は軟かい砂岩から出来て居るので、氷河は出来難いらしい。此の極地方で夏の間^{まる}全て雪が融けると云ふ唯一の地方である。第四帯と云ふべきは、コックバイン諸島である。

以上の研究の結果として、南米大陸の南角とグラハム・ランドとは、地理學上並に地質學上、同一の構造であると云ふことが明白になつて來た。

第十二章 蘇佛兩隊

以上の探検と相前後して忘るべからざる二つの探検がある。其は外でもない、スコットランドのブルース一行の探検隊と、フランスのシャルコーのことである。

スコットランドのエデンバラに在る皇立地學協會では、一千九百〇一年三月二十二日の評議會で、海洋學で有名なサー・ジョン・マレーが議長になつて、ブルースの計畫になる南極探検の事を發表した。此のブルースは、一千八百九十二年、ダンディの捕鯨船に乗つてグラハム・ランドの周囲を巡つたこともあり、フレッド・ジャクソンやモナコ公の組織した探検隊等について力を致した人であるから、斯かる事業を營むには極めて適當の人なのだ。

其の目的とする所は、先づグラハム・ランドの東にあるジョージ第四世海の方に向いて行き、夫れから捕鯨船に乗つて水路を求め、一つの陸地を探り得て、此處で五名の専門家と一緒に二年間冬期越冬しやう、而して船は直ぐに歸航し、更に探検に必要な食料を用意して、再び極地に進入する目的に便宜を與へやうと云ふのだ。

其の探検船は、ノルエーの捕鯨船『ヘクラ』號を買入れたもので、『スコチア』號と改名した。此の船はクライドの造船所で建造した三百噸の三橋船である。

『スコチア』號は一千九百〇二年に出發して、エッデル海に向いて出て行つた。元來エッデル海を探らうとして居たので、一萬二千八百米の索二條を備へて居た。斯くて一千九百〇三年二月二十二日、南緯七十度三十分の所まで達し、南オークネー島で越冬した。此の時ラウリエン島に一つの駐

在所を設けたが、これは後に至りてアルヘンティナ政府に譲り渡された。一千九百〇四年更にエッデル海に向つて第二回の突進を試みたが、三月十三日、コーツ・ランドと云ふ陸地の海岸近くまで行つた。これは『スコチア』號の達した最南點で、南緯七十四度である。

此の探検隊は、エッデル海の研究に於ては好結果を奏し、船長ブルース以下一同無事に、一千九百〇四年七月二十一日クライドに着き、エデンバラ市民の熱誠な歓迎を受けた。其の席上で、サー・ジョン・マーレーは、皇帝から探検隊に特に下賜せられたる祝電を捧讀し、スコットランド地學協會からは、マーレーの手を経て、ブルースに金牌を贈つた。

又元來フランス人は、前世紀の中頃、熱心に極地探検に従事したのであるが、其の後絶えて其の事が無かつたと云ふことを、非常に遺憾に思ひ、是非其の聲譽を回復しようとして起つたのが、シャルコーである。初めは

北極探検の筈であつたのだが、南極探検が盛んだからと云ふので、此の方へ向ふ事になつた。

此の探検隊は、極地探検と云ふことの外に、ノルデンシヨルドの南極探検隊を救援しようとして云ふことを企て、探検船『ラ・フランセー』號に乗つてフランスを出た。此の船がヴェノス・アイレスに着いた時、ノルデンシヨルドは既に船長ドリツフルに救はれて此の地まで來た時なのであつた。だから、シャルコーは、ノルデンシヨルドから南極地方の状況を聞いて、多少最初の計畫を變更したらしいが、先づ大體はバルマー諸島の外側を調査した後、ベルジカ水道の南西端を廻り、夫れからグラハム・ランドの西海岸をアデレード島まで探検し、越年地點は此の邊で求め、春期再び探検を繼續し、其の越年地點からノルデンシヨルドが探検したグラハム・ランドの東岸、又はアレクサンデル第一世ランドと陸続きの海岸を發見しようとして云ふ

ので、夏になれば、グラハム・ランドやアレクサンデル第一世ランドの内
地を探究し、船が氷に閉ぢられぬ中に歸らうと云ふのであつた。

此の豫定で進んだシャルコーは、ルイス・フィリップ・ランドの南西の延
長部グラハム・ランドの西岸、ベルジカ水道の南端で、キーンケ島を距る
約二十五軒キョウゴトの所にあるワンデル島で越年し、十分科學上の研究をなし、ピ
スマルク海峡に關する疑問を解決してしまひ、アレクサンデル第一世ラン
ドも、從來の地位よりは少しく南に在ると云ふことを発見したのだが、氷
塊の爲めに近づくことが出来ず、夫れから、グラハム・ランド西岸で未だ
探検せられぬ各地及びベルジカ水道の西北側になつて居るパーマー群島の
北岸未探區域の海岸を測量して、一千九百〇五年三月四日、マドラン港に歸
つた。これがシャルコーの第一回探検である。此の時の探検費は、三十萬フ
ラン以上で、新聞紙上で公衆から募つた。一萬フランだけは、國庫から補

助したのだ。

シャルコーの第二回探検は一千九百〇七年二月、フランス學士院で發表
せられたもので、學士院は、此の新事業の監督をなし、又之に必要な調査
をする爲めに特別の委員會を組織した。委員は、ブークエー・デ・ラ・グル
ジュ、マスカー、ゴードリー、ボルネー、ペリエー、ギュイヨン等の人々
で、此の探検に關する學術上の事業目録を調製することを擔任し、又一方
ではパリ地理協會の中央委員會は、二月八日理事會の決議で此の事業を贊
助し、其の監督者となる事になつた。其の爲め地理協會でも、ドリンス、
ローラン・ボナバート、ジュール・ジラード、アー・ドゥ・マルジェリー、シ
ヤルル・ラボール等の人々が、一つの委員會を組織し、調査事項の目録を調
製することにした。

シャルコーの用ゐた船は、『ブル・クオア』(何故に爲し能はざる乎)號と云

ふので、此の探検の爲めに特別にサン・マロの造船所でゴーチェーが建造したものである。此の船は、食料一百噸、石炭二百五十噸を積み、元來帆船なのだが、五百六十馬力の補助機關を有つて居るブリックで、長さ百四十一呎半、幅二十九呎半ある。其の乗組員は、ノルエー捕鯨船の會員を使ふことにし、フランスの海軍省や博物館、地理協會及びモナコ公の協力で、研究材料の完全なものを得たのみならず、完全な科學者の一隊も乗組んだ。其の主なもの、ボングレーンの水路學、ルーシェの海洋學及び氣象學、ゴッドフライの海流及び化學的觀察、グールドンの地質學及び氷河學、ゲーン及びリオヴィエの博物學、セヌークの地磁氣及び寫眞術などで、乗組員二十二名の中、十名は、『ラ・フランセー』號に乗組んだ人だ。

シャルコーの計畫に據ると、此の行に二年を費す筈で、ノルデンシヨルドの探検の時發見した化石産物を取調べ、又其の標本を採集し、夫れから

前回の探検に發見した此の地方唯一の避泊地シャルコー港で冬籠を濟ませ、翌春纜でルーベ・ランド(アレクサンデル第一世ランド)を探検する筈になつて居た。又此の旅行には、六個の自動發動機を捲きつけた纜を使い、一千九百〇八年十二月十六日頃、南極の氷に達する豫定であつた。

準備の整うた『ブル・クオア』號は、一千九百〇八年八月、南米の南部にある南極大陸に向うて發程した。同十二月十七日、バンタ・アレナを出發したのであるが、夫れから、アデレード島及びアガリヤエンス海峡の北部を測量し、百二十哩に亘る新陸地を發見し、翌年の夏、南シエトランド群島中のデセプション島及び其の附近を探検し、又アレクサンデル第一世ランドの西南に新らしい陸地を發見し、本年の春、漸く歸着したのである。

第十三章 現勢一斑

斯の如くして、南極探検は日一日と盛大に赴くに至つた。此の時に當りて、イギリスは、南極探検の英雄シャックルトン大尉を出したのである。

此の探検隊を載せた汽船『ニムロッド』號は、一千九百〇八年一月一日、リットルトンからエレブス火山の麓にあるマックマード灣に到着した。此の地點に上陸し、積んで來た種々な材料で、冬營の用意の小舎を、ロイド岬附近に建て、此の地を根據地とした。エレブス火山の頂上を距ること二十哩、噴烟の方向で南極地方上層氣流の方向を察知したのである。

三月五日、一探検隊を組織してエレブス火山攀登を企てた。一行は少尉アダムス、製圖家ブロックハースト、シドニー大學教授ダギッド、外科醫にて海圖製作家を兼ねるマシアル、外科助手マツケル及びアデレードの

科學者マアスマンの六名から出來て居た。此の一隊は三月五日雪車を驅つて出發し、七日早朝、海拔五千五百呎の地點で雪車を捨てて、皆々其の食料や寢具を負うて徒歩攀登し、其の夜海拔九千五百呎の地點まで來た。此の地點で三十時間に亘る大風雪に會うたのであるが、之と奮闘した結果、九日には、一萬一千呎の地點で舊噴火口に達した。十日、攀登を續行して到頭其の頂を究めた。現噴火口は直徑半哩長さ八百呎ある、多量の硫化瓦斯と水蒸氣とを二千呎の高さまで噴き出して居る。十一日、此の一行は無事根據地まで引きあげた。

此の冬營所で春の來るのを待ちながら種々な研究をなし、又一行を四隊に分けて、天氣快晴の時毎に其の準備をして居た。先づ各隊の任務を定めた。

第一隊は、南極地點探検。第二隊は、南磁極測定。第三隊は、地質調査。

第四隊は、『ニムロッド』號の本隊で、これは沿岸の探検と他の三隊の救助

とに充てゝある。

各隊の出発するの先にちて、根據地の南百二十哩まで、所々に糧食の埋藏地を作つて置いた。之と同時に、ダギッド、マツケイ、モトソンの三人から成り立つ南磁極探検隊は、根據地から北方に進んだ。初めの間は二百哩に亘る海氷の上を渡る爲めに、糧食や其の他の準備品を載せた二個の櫓を同時に運ぶことが出来ず、先づ一つの方を二哩の間だけ運んで置き、夫れから跡戻りして残りの一つを運ぶと云ふ風にして、漸々上陸して内地の高原に登つた。此の後非常な困難と戦つて、一千九百〇九年、即ち昨年一月十六日、南磁極を定めた。恰度南緯八十八度二十三分、東經百六十二度及び南緯七十二度三十五分、東經百五十四度の兩地點である。此の地點に『ユニオン・ジャック』を樹てた。此の時既に糧食が十分で無かつたので、非常に歸路を急いで海岸まで出たところが、往きがけに渡つた海氷は破壊し

て少しも痕跡を留めぬ。已むを得ず海岸に露營し、海豹などを獵して飢を凌いで居たが、幸に第四隊の『ニムロッド』號が、シヤックルトン大尉の命を帯びて救助に來たので、やうく助かつた。

南極地探検隊は、シヤックルトン大尉これが任に當り、アダムス、マーシャル、ワイルドの三人を伴つて出た。四頭の滿洲馬、四個の櫓、九十一日間の糧食を用意して出發し、十一月二十六日になつて、前のスコット大佐の率ゐた探検隊が到達し得た極南地點に至つた。これは根據地を出てから恰度二十四日目である。これからは馬を殺して食ひ、一部は歸路の糧食にとして埋めて置いて、次第に前進したところが、新らしい山脈が南東に走るのを發見した。十二月三日、高さ四十呎の山を越して其の頂上から南方を見渡すと、南極の方には一大氷河が擴がって居る。此の時は最早馬が二頭しか居なかつた。此處で氷河を上り始めたところが、困難は時と共に

加はりて進行が極めて遅い。十二月七日になつては、たうとう残りの馬も、氷河の罅隙に落ちてしまひ、ワイルドは樞と一緒に危く此の中に陥らんとして、纒に免れることが出来た、と云ふやうな調子。然し、千辛萬苦を排して大氷河を上り、東西に走つて居る大山脈を發見し、遂に高さ一萬呎の高原に達した。これから南極に續く大雪野を突進したところが、食物も次第に缺乏して來たので、日々の食物は二十オンスを減じ、一時間七十哩の速度をもつて居る颯嵐や、氷點以下二十二度二十分と云ふ極寒に吹雪と戦ひ、凍傷に悩まされたが、一月六日、南緯八十八度八分まで來た。ところが、吹雪は愈々暴威を逞しくして止まぬ。二日間も天幕の中に蟄居し、疲労と極寒との爲めに凍傷に悩んで居た。一月九日には吹雪は少しく鎮まつたが、體力は非常に衰へ、食料は全く盡きて、如何ともすることが出来ず、遂にイギリス國皇后の賜はつた「ユニオン・ジャック」を、南緯八十八度二

十三分の地點に樹て、歸路に着いた。然し、食料の缺乏と過度の疲労との爲めに赤痢に罹り、殊にマイシヤルは進むことが出来ず、アダムスを残して置いて歸路に着き、三月二日、ジャックルトン、ワイルドの二人は、無事「ニムロッド」號に歸つた。四日になつて、他の二人も無事に歸着した。

斯くて、人跡未到の最南點に達したジャックルトン大尉の一行は、一千九百〇九年六月十二日、無事本國に歸り、同月二十八日、「アルバート・ホルム」に於て皇立地學協會歡迎式が舉行せられ、副總裁皇太子殿下の御臨場があつて、大尉には金牌を授けられたのである。

第十四章 將來

世界の耳目を聳動させたシャックルトン大尉の探検と相前後して、幾多の南極探検隊は計畫せられた。或はブルースのエッデル海で再び海洋學上の研究をしようとするものや、スコット大佐の南極探検や、アルストフスキの極地探検、ニューヨーク博物館長オスボルンの提議した米國の極地探検がある。又北極に達したと云ふ有名なビリーも、南極探検を企て、居るとの説もあつた。

此の中で現今一番評判なのは、スコット大佐の一行であらう。此の一行の乗船「テラノヴァ」號は、二十五年前スコットランドで造られた捕鯨船で、噸數七百四十九噸、公稱馬力百四十馬力、速力九節で、探検には適した構造を有して居る。近年までニュー・ファンドランド沿岸の航海用に供せら

れたものださうな。

スコット大佐の探検隊に關する各種の報道は、近來の新聞に日々掲載せられて居る事實なのだから、爰に改めて委しく述べる必要もないだらうと思ふ。

スコット以外の極地探検の計畫は未だ實行せられぬらしいが、いづれ事實となつて現はれるに相違無い。兎も角、極地の研究といふことは、航空船乃至飛行機の完成といふことと共に、第二世紀に於ける頗る興味ある問題であり、且近き將來に於て解釋せられような問題であると云ふことを妨げぬ。

第十五章 希望

「極」の発見！、恐らくこれには何等の意義は無い。抑も科學的思想に乏じき人々が、「極」と云へば、何か目標になるものでもあるやうに考へて居るのが、大變な間違ひだ。既に「極」を定めると云ふことすらも、相當の科學的知識に俟たねばならぬのである。抑、南極探検のごとき、最も眞面目なるべき世界的大事業を成すに當つては、豫め周到なる計畫を定め、遺漏なき準備を整へ、前人の発見經過したる行路を踏襲せずして、始めて實行すべきである。

南極の地方！、今や或る地點には殖民的に住民が居る場所もあると云ふ。或は捕鯨に、或は海豹乃至諸種海獸の捕獲に、或は山羊の牧畜に適する地すらもあると云はれて居る。人間生れて北半球にばかり、北半球の中和帶

にばかり住まねばならぬ理由は無い。思ふ所に任せて縦横に濶歩すべきであると思ふ。だから、眞面目に計畫せらるゝ南極地方の研究の如きは、將來大に發展して貰ひたいものだとは、恐らく萬人の希望であらう！

南極探検終

豫告

豫告

スコット大佐

南極探檢實記

九月發行

ビリー

北極探檢實記

十月發行

内外出版協會

明治四十三年八月十二日印刷

明治四十三年八月廿五日發行

一九〇

南極探檢
定價金四拾錢

著作者 栗原敏次郎

發行者 山縣文夫

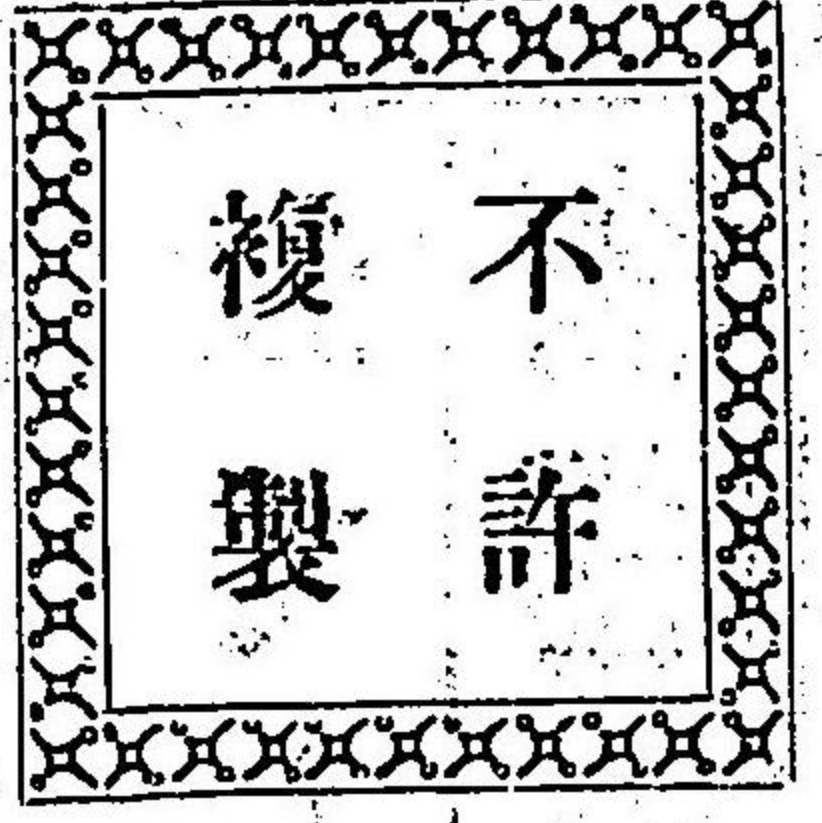
東京府下北豊島郡巢鴨町
大字上駒込十九番地

印刷者 藤本兼吉

東京市牛込區市谷加賀町
一丁目十二番地

印刷所 株式會社秀英舎第二工場

東京市牛込區市谷加賀町
一丁目十二番地



發行所

東京北豊島郡巢鴨町上駒込二十番地
電話(長距離加入) 下谷四百三十八番

内外出版協會
(振替貯金口座東京三百五十五番)

●●●●述譯邦木々佐●●●●

滑稽と趣味の無盡藏

いたづら小僧日記	定價金四拾錢 郵稅四錢
續いたづら小僧日記	定價金參拾錢 郵稅四錢
おてんば娘日記	定價金參拾錢 郵稅四錢
法螺男爵旅土産	定價金貳拾錢 郵稅四錢
ドン・キホーテ物語	定價金四拾錢 郵稅四錢
各國滑稽小説	定價金五拾錢 郵稅六錢

東京貯蓄銀行
東京三番五十二番地
内版出外協會 元版

全國都鄙の大小圖書館——學校附屬の文庫——
青年子弟を有する家庭——何れも此好著を缺く可からず

井口丑二編著

日本自助論	全一冊 定價金壹圓 郵稅十二錢
續日本自助論	全一冊 定價金七拾錢 郵稅八錢
二宮翁傳	全一冊 定價金八拾錢 郵稅八錢
報德教要領	全一冊 定價金四拾錢 郵稅六錢
報德物語	全一冊 定價金參拾錢 郵稅四錢

東京貯蓄銀行
東京三番五十二番地
内版出外協會 元版

博士マナー原 著 文士竹村修譯述

立志論

全五冊の内第三編まで既刊各冊定價金拾錢郵稅四錢宛

●本書は彼の "Pushing to the Front" を少しも省略する所なく翻譯したるものにして、他日全部完結の上は浩瀚なる書と爲るべし。譯者竹村氏は裏にスマイルス氏の「品性論」を譯せり。漢學の素養不淺と見え其の譯文は確かりしたるものなり。殊に雄健活潑なる原文の精神を能く寫し、行文明快にして雄勁なれば翻譯の臭味は少しも無く、其の文意を了解するを得べし。

●有名なる「アッシュンケ、ツィ、セ、フロント」の譯者なり。マーアンの氏が活動的生活を鼓吹する實際的教育家なることは既に世の知る所にし、如きは青年を鼓舞獎勵して發奮勉勵せしむるの良著ならざるのみ、行文流暢引例快活にして趣味津津たる好讀物たるを失はば譯文亦穩健勁捷を得、原著の精神を躍如たらしむるものあり、眞に青年は勿論、青年子弟を教育せんとする者にとりて無比の良書なり。

(中外英字新聞) (帝國教育)

版元 東京 東金 町三 上野 駒三 込百 十二番 地番 内 外 出版 協 會

田中鐵軒編著

絶島の南洲

定價金拾五錢郵稅六錢

樺山伯爵題辭 長谷場衆議院議長題辭跋
文及び南洲翁肖像挿入

本書は歐人にして新聞記者たること十餘年記者社會に鑑識を以て知らる、田中鐵軒氏が西郷南洲の謫居五ヶ年間の事蹟を、特世の英傑料に據りて記述した珍書である。南洲は曾て自ら大島三右衛門と稱した、それは最初に大島の本島に流され、二度目に其の屬島たる徳ノ島に流され、三度目に又他の屬島たる沖ノ永良部島に流されたからである。而して此の前後五ヶ年間の事蹟は頗る多端であつて、南洲傳を讀む者に別段なる興味を供する筈である。けれども從來世に現れた書には、一として十分に之を記述したるものが無い。本書は此の點に於て獨壇的價值を有して居る。何となれば本書は沖ノ永良部島其の他に残つて在つた多くの特殊材料に據りて、最も正確に、細大漏らさず、且つ極めて趣味豊富に記述した書であるからである。薩州出身の大官某氏は曾て言つた、南洲の眞面目は却て謫居中の彼に於て見るべしと。此の説の當否は別として、兎に角謫居五ヶ年間の南洲を描いて詳密正確斯の如き書は斷じて他に無い。英雄の傳記を讀むことを好む者は、必ずや愛讀書の一となすに至るべし。

版元 東京 東金 町三 上野 駒三 込百 十二番 地番 内 外 出版 協 會

偉人研究言行録

全國數百の新聞雜誌は皆口を極めて此叢書が國民氣風の上に及ぼす影響の大なるべきを言へり、其の健全堅實なる感化の到る處に現はれむことを望めり、全國都鄙の大小圖書館は皆此叢書を購入して入館者の成るべく多く之を繙かむことを望み、又各地市町村の青年會各種講習會小學教員諸君等よりの購求申込は近日に至りて殊に多し。

全百卷の内六十册發行

特價 第一編より第六十編まで 六拾册 取揃へ御注文の金拾五圓(郵税共)

刊續

第六十一編より第六十二編まで

セシル・ローズ言行録
ジョン・ハーワード言行録

定價 金拾五圓
郵税 金四拾錢
送料 金四拾錢

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨東 京東 金貯管振 元版

書著大五スルイマス

本讀好の養涵性徳▲訓教大の實着健穩▲
力動原の化感士名▲範模活の營自立獨▲

職分論	品性論	勤儉論	自助論	勞働論
-----	-----	-----	-----	-----

金壹圓五拾錢 小包郵稅拾貳錢
金壹圓五拾錢 小包郵稅拾貳錢
金壹圓貳拾錢 小包郵稅拾貳錢
金壹圓貳拾錢 小包郵稅拾貳錢
金壹圓五拾錢 小包郵稅拾貳錢

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨東 京東 金貯管振 元版

りれなと圖版の人吾亦も空大

補譯二丑口井

飛行機通解

錢四稅郵・錢拾四金價定

日本の空に大鳥の如く飛行機の飛ん

目次

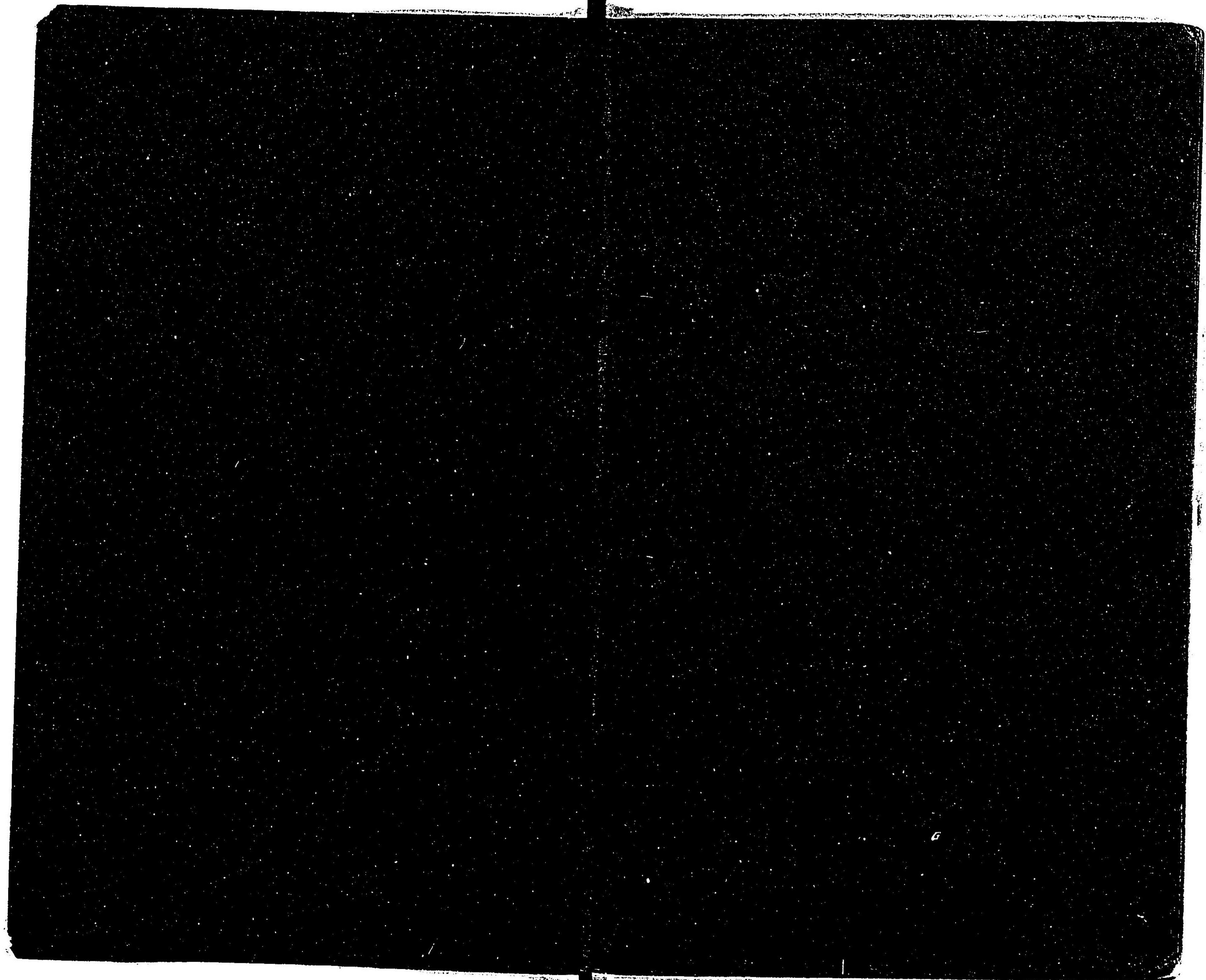
第一章	總說
第二章	氣球
第三章	空船
第四章	重質航空器
第五章	空葉飛行機
第六章	空葉飛行機の理論
第七章	構造及び材料
第八章	出發及び降下
第九章	發動器
第十章	模範的飛行機
第十一章	航空器の用途
第十二章	試験及び練習
第十三章	空中旅行の心得
第十四章	航空器の現在未來
附錄	各國飛行術の獎勵

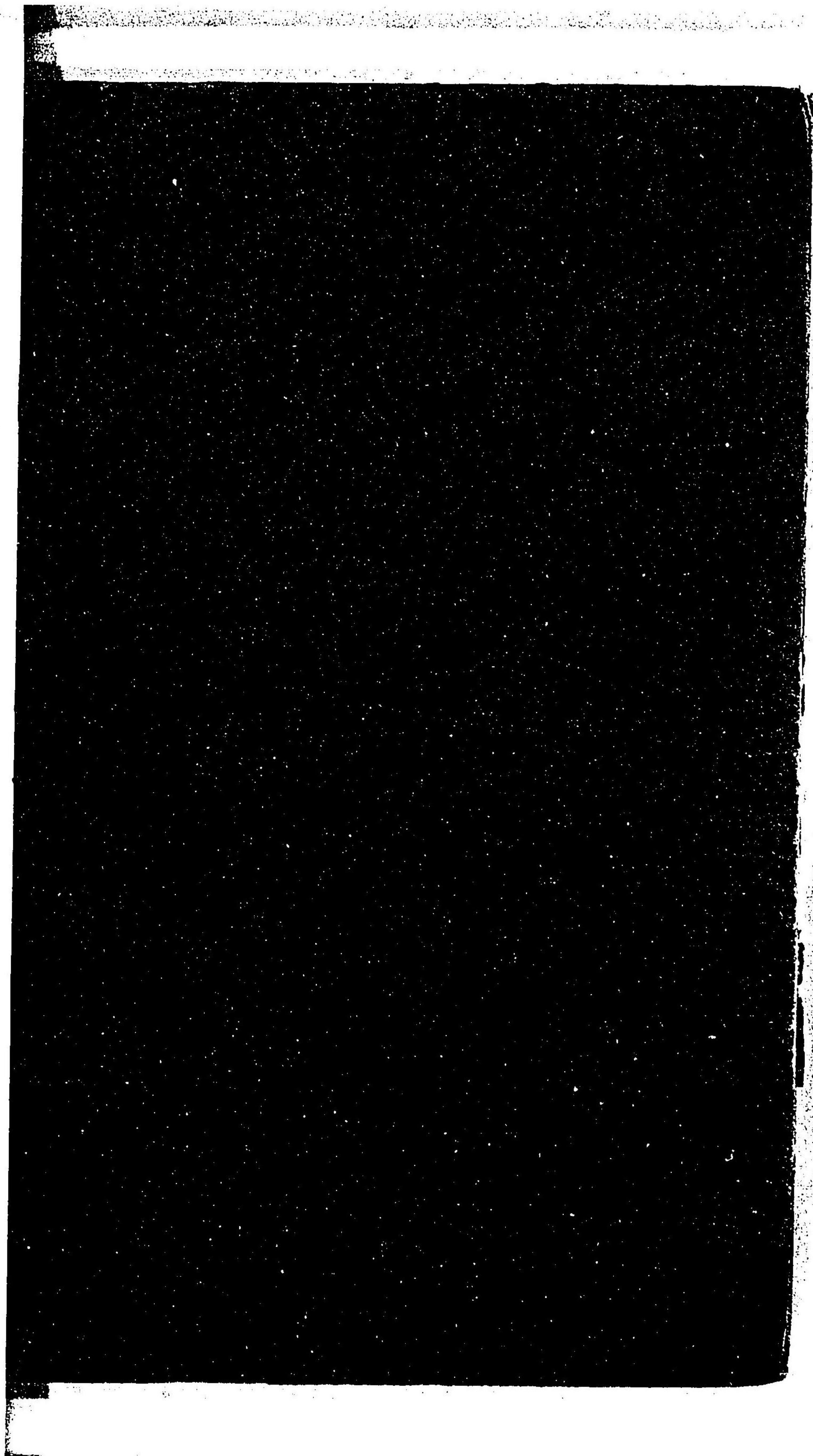
だことは一度も無
 東洋第一の強國も心
 ない。歐米で
 は各種の飛行機が數百哩
 の飛行を試み、且つ成功し
 た。飛行機の進歩は多し。歐米の
 飛行機の進歩は飛行機の速
 力よりも速かである。飛行機
 の進歩は、今世紀の
 一大史實たるべきもので、必
 ず有らねばならぬものだ。
 本書は譯者が歐米最新刊
 の書に基き、多くの外國新
 聞雑誌をも材料として、飛行
 機の見聞を知らるゝ通り、飛行
 機の新知識に興味を
 感ずる者に取っては、實に
 此の上無き讀み物だ。

會協版出外内 元版

25
965

4





25

965

026987-000-2

25-965

南極探検

栗原 敏次郎/著

M43

ADH-0007



